

Title	汲古儲蔵志(承前)
Sub Title	An annotated bibliography of Shimizu Kyuko's collection: continuation
Author	大沼, 晴暉(Onuma, Haruki)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2008
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.43 (2008. ) ,p.265- 346
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20080000-0265">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20080000-0265</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 汲古儲蔵志(承前)

大沼晴暉

## 例言

一、本書は故清水汲古氏が自らの蔵書について識した分類体の略解題「汲古儲蔵志」自筆稿本八巻の後半四巻を翻印したものである。索引と解題とは頁数の関係で、次号に掲載の豫定である。

一、翻字はなるべく原本のおもかけをとどめることに努めたが、印刷上制約があり原本そのままの形はとっていない。

1、漢字は新旧別体を生かし、類似の字体で翻印した。

2、字詰・字配りや字の大きさは、印刷上の制約のため必ずしも原本どおりとはなっていない。二行割り、三行割りの部分も同様に、原本の改行様式とは異っている場合がある。

3、原撰者は改行符として「」をもちいている。それに対し翻

字者が新たに附した場合は／を用いた。

4、原本は未定稿であり、句読や改行、一格空きなど体式は必ずしも一定していない。しかしこれらを無理に統一することは行わなかった。

汲古儲藏志 卷五

地誌・紀行

四地誌、紀行

(全國)

國花萬葉記 小横本十四卷廿三冊木箱入 一四六 1

菊本賀保撰

無刊記 天保十年大坂求板補正再摺

但し才六卷(和泉国)末難波丸綱目才七冊卷尾に「天保十年

己亥十月改正」心斎橋通唐物町」大坂書林河内屋太助」とあ

り、右は或は難波丸綱目のみの出版者ならんか、疑を存す

本書中 山城名所諸羽二重四冊増補難波丸綱目七冊武藏二冊

之にて大半を占む、其他國花分明集、大日本米糞袋等の題目

を附し巻次不統一なり、

小型横本 紺表紙 寸法 11.2×16cm 題簽「日本國花萬葉記」

各冊目錄題を貼り巻次内容を示す、

單辺 廿行又廿二行 毎行廿字前後 絵入

巻次	丁数	挿絵	(頁分)
1上	72	5	
1下	51	9	
2上	61	4	
2下	48	2	
3	71	9	
4	29	5	
5-1	57	1	
5-2	35	0	
5-3	40	15	
5-4	51	0	
5-5	58	11	
5-6	62	8	

6	45	6	
6	7上	7下	
7上	63	67	
7下	54	5	
8	39	3	
9	68	3	
10	76	2	
11	36	4	
12	67	7	
13	38	3	
14上	43	2	
14下	119	1231	14

(表野省略)

注、本書原刊は元禄十年大坂雁金屋庄兵衛外五名合板十四卷

廿一冊、之に安永六年大坂書肆陰山三郎兵衛難波丸綱目を

二冊増補して廿三冊とす、

諸州巡覧記 中本七卷七冊 九四 2

貝原篤信撰

文化十二年京版 正徳三年茨城多左衛門板(原板)の求板後

印、

刊記 続諸州めぐり巻末別紙に「文化十二乙亥年求板」皇都

書林「勝島喜六郎藏板」堀川通高辻上ル町」植村藤右衛門」

六角通麩屋町東入」小川多左衛門」寺町通錦小路上ル」上田

半三郎」三条通寺町西エ入」山中善兵衛」

美濃半切 藍色表紙 寸法 18.6×12.5cm 題箋、中央

「西遊諸州めぐり(国名)一(二一五)」巻六、七「諸州めぐり西北上(ト)」

扉題「益軒貝原先生著、諸州巡覧記、西北紀行、南遊紀行、平安瑞錦堂藏板」

單辺 13.6×9.7cm 八行 十六乃至十九字位 柱記「西北紀行」

本書は西北紀行上下南遊紀行上中下統諸州めぐり上下 計七冊を合せるもの、従て夫々外題を異にす 絵入、

丁数(絵、頁分) 廿一(七) 廿三(四) 三十二(五) 廿七(四) 三十五(二) 廿三(ナシ) 廿一、(なし)

注、益軒の紀行、行文平明率直、虚飾なし、自然を楽み悠々、曳杖の態度紙上に躍如たり、とは和田万吉博士推讚の辞也、

改正人國記 大本二巻二冊 七〇 3  
著者不詳

刊年不詳、原刊元禄十四年須原屋茂兵衛板(中本)の後印  
刊記 扉紙に「撰津書房 星文堂」

美濃判 赤茶表紙 25.5×18.2cm 扉題「六十六州人國記」  
日本各國風土図説「内題」「人國記巻之上(下)」

單辺 19.8×13.2cm 九行 廿乃至廿四字位

柱記「人國記巻上(下)」丁数 上六六 下四九丁 各國図入

巻首に「元禄庚辰端午日、木齋平祖衡」跋五丁、自序一丁半あり、

注、出版者星文堂は藤屋弥兵衛、元禄板の巻尾にありし漢文跋を誤りて巻首に置く、

東遊記 半紙本五巻五冊帙入 二七七 A 4  
橘南谿撰(宮川春暉)

寛政七年京大坂合板 原刊と同年なれども出版者を異にし、初版の後印なり、

刊記 寛政七年卯八月「書林」京都寺町通松原下ル町「勝村治右衛門」同堀川通高辻上ル町「梶川七良兵衛」大坂心齋橋通北久太良町「吉田善藏」

半紙判 縹色表紙 寸法 22.5×15.5cm 元題箋、黄色紙  
「諸国東遊記一(二一五)」内題、「東遊記巻之一」

奇談 單辺 17.5×13.3cm 九行 十九乃至廿四字位 絵入

丁数(挿絵、頁分) 廿六(一) 廿(一) 廿(一) 廿(一) 三十九(四)

挿絵は何れも知名の画家之を描く、円山應瑞、山口素絢、長沢芦雪、吉村蘭洲、松村月溪等、印面は後印ながら初版の如く精良、巻首に「寛政乙卯歳八月、愚山松本慎」漢文序三丁あり、

東遊記後篇 半紙本五卷五冊帙入 二七七B 5

橘南谿撰

寛政九年京大坂合板、原刊と同年ながら初版の後印と推す、

刊記 寛政九年丁巳正月「浪華書肆」吉文字屋市左衛門「藤

屋弥兵衛」塩屋平助「田中屋宗助」金屋宗介「皇都書肆」秋

田屋藤兵衛「萬屋九兵衛」著屋儀兵衛」

判型、表紙、寸法、正編に同じ、元題簽「諸国東遊記後篇一

(二一五)」

單辺 18.5×13.1cm 十行 廿四、五字前後

丁数 廿一、十六、十七、十八、廿、挿絵、各卷二頁分

巻首に正篇と同じく松本慎序を再び載す、

西遊記 半紙本五卷五冊帙入 二七七C 6

橘南谿撰

寛政七年京大坂合板、初版 絵入

刊記 寛政七年卯三月「書林」京都寺町通松原下ル町「勝村

治右衛門」大坂心齋橋通安土町「吉田善藏」

判型、表紙、寸法、東遊記正篇に同じ

元題簽「諸国西遊記一(二一五)」單辺 17.8×13.2cm

每半葉十行、毎行廿六字前後 丁数 廿一、十八、廿、廿一、

廿三

挿絵 各卷二頁分、巻首に伴蒿蹊序三丁あり、

西遊記續篇 半紙本五卷五冊帙入 二七七D 7

橘南谿撰

寛政十年京大坂合板、初版 絵入

刊記 寛政十年午六月吉日「書肆」京都寺町通松原下ル「勝

村治右衛門」大坂心齋橋通安土町「吉田善藏」

判型、表紙、寸法、東遊記正篇に同じ

元題簽、黄色紙「諸国西遊記後篇一(二一五)」單辺 18.3×

13cm

十行 廿六字前後 丁数 十六、廿、十八、廿、十九、

挿絵 各卷四頁分、

注、西遊記正統二篇共初版なれども印面良からず、賣行良き

ため大部を摺立てたる故にや、

按ずるに、東西遊記初版は次の如し、

出版者は四編を通じて勝村治右衛門、吉田善藏の二名、

刊年は東遊正篇 寛政七年卯八月、同後篇 九年丁巳正月、

西遊正篇、七年卯三月、同続篇、十年午六月吉日なり、

然るに後印は何れも初刊年記をそのま、残し出版（求板）者  
名を埋木す 或は吉田善藏の住所心齋橋筋久太良町に變りた  
り、

別本東遊記 半紙本五卷五冊 二五七A 8

寛政七年原刊の後印 袋付

刊記 初版刊記を残す、寛政七年卯八月「書林」京都寺町通  
松原下ル」勝村治右衛門」大坂心齋橋通安土町」吉田善藏」

別に半丁奥付あり、三都書物問屋「江戸日本橋通一丁目」須

原屋茂兵衛」同通二丁目山城屋佐兵衛」同通四丁目須原屋佐

助」同両国横山町一丁目出雲寺万次郎」同両国横山町三丁目

和泉屋金右衛門」同浅草茅町二丁目須原屋伊八」同芝神明前

岡田屋嘉七」大坂心齋橋南江二丁目敦賀屋九兵衛」同心齋橋

安堂寺町秋田屋大右衛門」京都寺町通松原下ル勝村治右衛門

版」

即ち版元勝村にて三都十名合板なり

巻首に松本愚山及伴蒿蹊序を載する外 書誌前書に同じ、丁

数のみ小異、

東遊記後篇 半紙本五卷五冊 二五七B 9

寛政九年板の後印、（求板）二七七B以後の刊年、とす

無刊記、半丁奥付を附し三都発兌書肆十一名を列挙す、内版  
元は依然勝村治右衛門なり、東遊記前篇の奥付に比するに、  
三名（出雲寺万次郎、和泉屋金右衛門、敦賀屋九兵衛）を脱

し、四名（江戸通二丁目小林新兵衛、芝神明前和泉屋吉兵衛、

大坂心齋橋北久郎町河内屋喜兵衛、京都寺町通高辻上ル勝村

伊兵衛）を加ふ、

元題簽 白紙なる外 前書二七七Bに同じ（書誌）

西遊記 半紙本五卷五冊 二五七C 10

寛政七年京板の後印

刊記 初版の刊記を残し（七年三月勝村吉田二名）別に奥付

を載せ三都書物問屋を列記す 十名、氏名は東遊記二五七A

附載の奥付店名に同じ、版元勝村なり、

書誌 前書二七七Cに同じ

西遊記續篇 半紙本五卷五冊 二五七D 11

寛政十年京大坂合板の後印

刊記 正篇と同様 初版の刊記をそのま、残し別に奥付半丁

を付し三都發兌書肆を列記す、其氏名十一名東遊記後篇の奥付に同じ、版元勝村治右衛門なり、

書誌 前書二七七Dに同じ、

華夷通商考 半紙本二卷二冊 一〇三三 12

西川忠英(如見)撰

元禄八年京版

刊記 元禄八乙亥年三月中旬書林「梅村弥興門」古川三郎兵衛「雙梓」

衛「雙梓」

唐本型、茶革色表紙 22.6×14.3cm 題簽欠

扉題、支那天竺道程土産人倫於風俗「華夷通商考」洛陽書林

甘節堂「学梁軒」同刻]

内題、華夷通商考上(下)、長崎西川忠英如見子誌]

單辺 16.1×11.3cm 七行片仮名交り、毎行十九乃至廿三字

位

柱記「華夷通商考」又は「華夷」丁数 三十四、四十二、

増補華夷通商考 半紙本五卷五冊 一〇四 13

西川忠英撰 宝永五年京版

刊記 宝永五戊子年三月穀旦「寺町五条上ル町梅村弥右衛門」

寺町松原上ル町今井七郎兵衛「全刻」

半紙判 単色家紋紗綾空押表紙 寸法 22×16.2cm

元題簽「華夷通商考」有図繪「(三……)」題簽卷一及四缺損

内題「増補華夷通商考」長崎西川求林斎輯「

單辺 15.8×11.2cm 七行 廿一字前後 片仮名交り

丁数 廿六、廿九、三十四、三十六、三十五 挿絵、図共、

三、五、二、六、〇、頁分

日本歳時記 大本七卷七冊 二二七 14

貝原好古編 貝原益軒補 貞享四年成る

貞享五年京版 絵入 初版

刊記 貞享五年戊辰三月上瀬 雒陽書肆 日新堂寿梓□<sup>④</sup>]

美濃判唐本型 茶革色表紙 寸法 26.3×17.2cm

題簽、大部分欠損「日本歳時記月次」(一一七)]

内題、「日本歳時記卷之一(一一七)」柱記「樽桑歳時記」

單辺 18.8×13.9cm 十行 廿乃至廿五字位

丁数(挿図、頁分)三十一(一)廿六(一)廿(一)三十九

(一)三十一(五)十七(一)廿九(一)

卷首、「貞享丁卯晚秋念日、貝原篤信書于筑前荒津之損軒」

序及「貞享丁卯未夏望日、筑州晚出貝原好古識」自序あり、

注、日新堂は大井七郎兵衛の堂号

別本日本歳時記 半紙本七卷四冊 一五六 15

貞享五年原刊の求板再摺 刊年不詳

刊記 原刊たる日新堂刊記を残し 更に奥付半丁、「貝原先

生編輯目録 醉墨齋藏板」を附す、その末尾に 書林」大坂

村上清三郎」京都小川太左衛門」江戸賣所小川彦九郎」と記

せり、

半紙判 青表紙 222×158cm 元題笈、「鎌日本歳時記 春

(夏、秋、冬)」巻次、春冊、巻一、二 夏冊巻三、四 秋冊

巻五、冬冊巻六、七

内題、柱記、匡郭、丁数、挿絵、全く前書二二七と異なること

なし

印面後印にも拘らず精良なり、

(畿内) (山城)

雍州府志 大本十卷十冊 二六八 16

黒川道祐撰 天和二年成る

貞享三年京版の後印、刊記 卷十、五十八丁裏に「貞享三丙

寅年九月吉日、書林 (書肆名削去)」

大美濃判 薄茶表紙 寸法 298×181cm 元題笈殆欠損し

才三卷のみ存す、「雍州府志神社門下三」

内題「雍州府志卷才一(一一十)」單辺 21.9×16.2cm 十

四行 廿二字 漢文、版心、魚尾「雍州府志卷才一」

丁数 四十三、廿九、廿一、五十一、五十六、四十、三十七、

四十七、三十一、六十四、

才一卷に付凶六丁、巻首に林戀序一丁半「貞享元年孟夏之日

林整宇主人識」人見野節序一丁半「貞享元年甲子孟夏日鶴山

野節題」及自序半丁あり、

注、本書類本殆刊記無し、出版書肆不詳、

内裏籙 半紙本六卷六冊映入 二二六 17

著者不詳 享保二年京版 原刊 絵入

刊記「享保二丁西年三月吉日」皇都書肆」上村四郎兵衛行

半紙判 深緑無地表紙 寸法 221×16cm 元題笈、黄色紙

中央「山城内裏籙一(一一六)」或は「名所たいりひいな」

内題「内裏籙卷之一(一一六)」柱記「京の花」

全巻を通じて目録を欠く、單辺 18×13.7cm 十一行 廿四

五字前後、丁数 廿七、廿五、廿、廿三、十一、十六、総百

二十二丁

挿絵(巻毎) 十四、十二、十、五、七頁分、

注、巻二及三の丁付、才一丁に「二初」とあり、従て才一丁



欠に非ずと思はる、

巻一首に宮中及後宮を描ける見開二図あり、

本書表紙痛み烈しけれども本文印面精良、初摺なり、

別本内裏雛 半紙本六卷六冊 二二 18

宝暦七年求板本の安永中改正再摺

刊記 宝暦七年版の刊記を残す、即ち「宝暦七年丑十月求板」

花洛書林「寺町通姉小路上ル町」錢屋惣一郎「三条通寺町行

當」林源兵衛「三条通河原町西へ入町」正本屋吉兵衛」

半紙判 濃緑角型模様表紙 寸法 22×16.2cm 改装、全卷

裏付 卷六末尾二丁補写、

書題箋、「内裏雛」(一一六)、目錄題、「山城名所寺社物語

卷之一(一一六)」全卷右目錄二丁宛存す、

内題「内裏雛卷之一(一一六)」

柱記、匡郭、行数、字詰、丁数、何れも前書二二六に異なら

ず、挿絵の内 卷一の見開口絵二張無し、宮中を画けるの故

ならんか、

卷六の尾二丁補写極めて丁重なるが、内に京都所司代を連記

し土井大炊頭に至る、其就任明和六年八月より安永六年八月

なれば本書刊行亦安永中なるべしと推定す、(和田万吉博士)

京城勝覽 中本二卷一冊 一四七 19

貝原篤信撰

享保六年京版 享保三年原刊の再摺

刊記 六角通御幸町西へ入町」書林茨城多左衛門開板」卷末

に更に奥付半丁、「貝原先生編述目次、書林柳枝軒藏版」著

書三十三部を記載し欄外に「享保六歳」と記す

美濃半切 藍無地表紙 18.3×12.5cm 元題箋、茶色紙「京

都めぐり」扉題、「貝原先生著、京城勝覽、洛陽書林柳枝軒」

内題、「京城勝覽」

單辺 13.3×9.6cm 八行 十一、二字詰 柱記「京覽上

(下)」

丁数 上五十四、下五十二 本書上卷本文才五、六、七の三

丁落丁、

挿絵、本文每頁の上欄三分の一を古雅なる挿絵とし路上神社

佛閣を描く、版下亦太めの文字にて心地良し、

巻首に自序三丁あり「宝永三年立春日貝原篤信記」

(貼紙)

小川多左衛門 柳枝軒

京城勝覽 二卷二冊 No. 一四七

家藏本の奥に享保三戊戌年春元版

天明四甲辰年夏再刻云々とあり

和田萬吉著古版地誌解題所収本は享保六年刊なるも石家藏

本に據り初版は享保三年なるを知る。書賈集覽所載刊年實

永三年は益軒の著作年代にして誤れり。

別本京城勝覽 中本二卷二冊 八三 20

貝原篤信撰 下河辺拾水画

天明四年再刻

刊記 享保三戊戌年春元版「天明四甲辰年夏再刻」六角通寺

町西江入「小川多左衛門」六条茶屋町西洞院西入「永田調兵

衛」寺町通六角上ル町「蕃屋宗八」堀川通二条下ル町「越後

屋治兵衛」

美濃半切 黄色無地表紙 寸法 18.2×12.7cm

書題簽「京城勝覽上(下)」内題「京城勝覽」

單辺 15.4×10.9cm 十行 十一、二字 柱記「京覽上(下)」

丁数、上五十四 下五十二 挿絵は、本文の毎頁半紙余を区

切りて挿絵とす、巻首に撰者の自序三丁、

接するに本書は前書とは全く別版にして、版下挿絵総て異り

文章も亦時に小異を見る、

京羽二重大全 小横本八卷八冊 五三 21

水雲堂孤松子撰 僧寬量補訂

延享二年、宝永二年橘屋清安板の増補版(三版)

刊記 延享二乙丑年孟春「洛下油小路通佛光寺上ル町」書林

水雲堂「橘屋治右衛門板」

半紙半切 濃藍色表紙 11×16cm 元題簽、「改正京羽二重

大全二(一八)」目錄題、「京羽二重卷一目錄」

單辺 十八行 十六字前後 柱記「羽二重」

丁数 六十、三十三、六十六、五十三、廿二、三十一、三十

八、五十九、

挿絵及図 卷一、四 卷二、一頁分

巻首に序「于時延享二年<sup>乙丑</sup>孟春、洛陽沙門、寬量」

注、本書初版は貞享二年京羽二重大卷六冊京、小島弥三右衛

門、同徳右衛門板、再版は、宝永二年橘屋清安板京羽二重七

卷七冊、以後延享、天明、文化に増補版出づ、

京之水 大本二卷二冊附図二鋪原映入 八二 22

秋里湘夕撰 下河辺拾水画

寛政三年京版 絵入 初版

刊記 寛政三年辛亥四年發行「京都書林」小川多左衛門「野

田藤八」吉野屋爲八」

美濃判 薄藍色表紙 寸法 25.7×17.9cm 元題笈、黄色紙

中央「上(下)、京之水、鱗之卷(鳳之卷)」

單辺 18.4×12cm 十行 廿五乃至三十一字位 柱記無し

丁付を每葉裏のど匠郭外に「**上九**」の如く附す

丁数 上三十三、下廿六 挿絵、上八、下五頁分

巻首に漢文序「寛政庚戌冬至之日、平安大江資衡撰」

附載二図

大内裏図一舗 元題笈「京之水 大内裏御図 完」

寸法 72.8×51.1cm 匠郭 68.4×53.5cm

花洛往古図一舗

元題笈、黄色紙「京之水、花洛往古図、桓武天皇延暦年中平

安城開闢より順徳院承久年中まで大内裏の間凡四百三十年計

の京師の相を図也今寛政三年より五百年前の体相也左京右京

の町巷町の廣四十丈是を分間に積て方四分とし大路小路の廣

は四丈を一分とす此法数を以て廣狭を知べし」

寸法 101.8×84.1cm 匠郭 96×80.3cm 本図の左下隅欄

外に刊記、「京都書林、小川多左衛門、野田藤八、殿爲八」

原帙、紙装、彩色雲形模様、中央題笈「京の水 全二冊」

注、京の水 図付は中々稀品にして珍重せらる、印面佳良

装本亦典雅なり、

別本京の水 大本二卷二冊 一六 23

寛政三年京板 給入

前書八二と全く同板なれども稍印面薄し、其の附図を缺く、

(攝津)

蘆分船 大本六卷六冊 複四一 24

大阪だるまや木村助次郎複製 大正十三年刊

一無軒道治撰 延宝三年大坂版

刊記 右芦分船者撰州難波地景古今名所記也予潜求之聊爲童

蒙繪其所々令板行者也「延宝三年」陽月吉辰「書林」山本氏

理兵衛開板<sup>㊦</sup>」

大美濃判 青色無地表紙 寸法 27.3×19.4cm

題笈「難波蘆分船大坂鑑卷一(一六)」單辺 22.6×16.9cm

十三行 廿乃至廿二字位 絵入 扉題「芦分船」

内題「芦分船才一(二一六)」柱記「芦分」

丁数 廿六、十五、廿三、廿、十三、廿一、総百十九丁

挿絵、十九、十、十七、十四、十、十六 計八十六頁分

延宝三年自序二丁半、同年洛陽東山桑門盤溪の跋二丁あり、

戸川残花藏印、

注、本書文章稍崇佛 舞文の傾あれども大阪地誌として最も古きものに属し、挿絵佳なり

有馬山温泉小鑑 半紙本一冊 映入 一二二 25

撰者不詳 貞享二年有馬版

刊記 貞享二乙 廿六月吉日「有馬谷之町」菊屋五郎兵衛開板

半紙判 紺表紙 22.5×16.1cm

元題簽、「笹稲ありまこかみ、み葉野有馬小鑑葉笹ひとりあんない入全」内題、「有馬山温泉小鑑」

單辺 20×13.9cm 十三行 廿五字前後 絵入

柱記「小鑑」丁数 墨付三十一丁 内目錄一丁

挿絵 廿頁分、

注 本書は地方版として珍めづして相當稀書として扱はる、

有馬湯山記 中本一冊 五一 26

貝原篤信撰 宝永八年京版 絵入

刊記（陰刻）「宝永八年孟春吉辰 茨城多左衛門藏版」

美濃半切 紺表紙 18.2×12.1cm 題簽欠

扉題、「益軒貝原先生著、有馬湯山記、京上 書舗柳枝軒」

内題、「有馬山温泉記」單辺 13.4×9.7cm

八行 十三、四字 墨付六十五丁 内目錄一丁半

挿絵 十三頁分 柱記「有馬記」

文章は著者の京都より中国街道を経て有馬温泉に至る紀行なり、行文平明を極め説明懇切なり、

別本有馬湯山記 中本一冊 三一〇 27

享保六年京版、宝永八年原刊に河合章菟の紀行を追加す、

合紀行は正徳六年に單行したるを茲に合冊再摺す、

刊記、丁付八十三丁ウに、宝永八年の陰刻刊記を残し、その

次葉に「貝原先生編述目次、書林柳枝軒藏板」を載せ その

欄外に「享保六歳」とあり、更に卷末に「正徳六歳孟春吉辰

茨城多左衛門版」

製本 18.5×12.5cm 題簽、「有馬湯山道記」

判型、表紙、扉題、匡郭、行数 総て前書五一に同じ、

益軒の記事に次で 岡山藩士河合章菟の「有馬山温泉記追加」

目錄一丁 本文四十四丁を加ふ 挿絵三頁分

温泉游草 半紙本一冊 二七二 28

僧元政撰 自堅子訂

刊記 扉題に「書林 爾弓齋爾弓齋梓」

半紙判 褐色表紙 22.6×16cm 元題簽、「温泉游草全」扉

題、「草山好子手定、門葉自堅子重訂、温泉游草、書林 爾

弓齋繡粹」

單辺 18.7×13.2cm 九行又十行 十九字 漢文

墨付廿二丁

寛文八年松庵朴元序二丁、游草本文九丁半（有馬温泉に遊ぶの記なり）門人自堅子の悼詩及温泉再遊十一丁、

注、草山、妙子共に元政の号、和漢の学に通じ詩文に工、扶

桑隱逸傳等を著す、寛文八戊申竣 年四十六、

兵庫名所記 半紙本二卷一冊 四八 29

植田下省子撰

宝永七年兵庫津版 絵入

刊記 卷末跋の裏に「撰州兵庫津」菊屋新右衛門」開板」

半紙判 暗緑無地表紙 22.5×13.9cm

元題箋、「崎兵庫名所記」内題、「兵庫名所記卷之上（下）」

單辺 16.1×11.5cm 十一行 廿乃至廿三字位 柱記、「上

（下）之卷」

丁数 上三十五、下廿四 挿絵 各卷八頁分

宝永七年草沢医師の序二丁、同年自跋半丁、「宝永庚寅端午

日 草沢医生識」「宝永七庚寅八月良旦 植田下省子」

（大和）

南都名所道筋記 半紙本一冊帙入 二三一 30

撰者不詳

貞享元年奈良版 刊記 卷末十九丁ウに

「此名所集自古数多雖爲板行／或者繁而虧時役亦不成蒙／味便然予頃儲此一書新／令開板竟」貞享元子八月十五日 南都樽井町」

樽井町」

半紙判 青表紙 23.2×16cm 題箋欠 内題、「南都名所道筋

記」單辺 21×14.1cm 十一行 廿一乃至廿五字位

柱記無し、絵無し 墨付十九丁

戸川残花藏印

注、右書貞享三年版存すること高木、家藏地誌に出づ、

和州巡覧記 中本一冊 二二三 31

貝原篤信撰 元禄九年成る

享保六年 茨城多左衛門板

刊記 卷末別紙「貝原先生編述目次 書林柳枝軒藏版」欄外

に「享保六歳」とあり

美濃半切 藍色表紙 18.1×12.2cm 題箋欠

扉題、「遊和州者持此書則靈地遺跡行程里数不假嚮導而足矣、

和州巡覧記、書林柳枝軒茨城方英謹識」内題、「大和廻」

單辺 11.8×8.7cm 八行 十八字前後 挿絵無し

丁付「大和一…」柱記なし 墨付八十六丁

卷末に「元禄九年以上元日 貝原篤信記」とあり、

注、本書は恐らく再摺にて、本書以外に原刊あるべし、

吉野山獨案内 半紙本六卷五冊 複六六 32

珍書保存会石川巖複製 大正八年刊

謡春庵周可撰 寛文十一年版

刊記「寛文十一年衣更着日」吉野山人「揺春菴周可」吉野屋

惣兵衛開板]

半紙判 茶表紙 23.6×17.1cm 卷五及六を合冊す

題箋、<sup>入</sup>吉野山獨案内「(一六六)」

内題、「吉野山獨案内卷一(一六六)」單辺 20.3×15.4cm

十行又十二行 廿字前後 每卷目次一丁、自跋二丁半

丁数(巻次順) 廿五、十七、十三、廿三、十五、十六、

挿絵(頁分) 七、三、五、六、五、三

計百九丁

廿九頁分

(東海道)

鴨長明海道記 大本二冊 八四 33

源光行撰 貞應二年成る

本紀行は光行同年の鎌倉下り記にして鴨長明作と称するは誤り、この「海道記」群書類従紀行部卷三百三十所収、寛文四年京版

刊記「此海道記始而一覽之時則令<sup>レ</sup>書生加校合求得他本可改

而已」慶長三年季秋中瀬「丹山隱士玄旨在判」寛文四年<sup>辛曆</sup>

十一月吉日」

美濃判 焦茶表紙 25.8×16.6cm 元題箋「長明海道記上(下)」

内題、「鴨長明海道記」單辺 20×13.7cm

十行 十九乃至廿三字位 柱記「海上(下)」丁数 上三十

四 下三十三丁

東海道驛路の鈴 半紙本五卷五冊 一八 34

大曾根佐兵衛撰(国書総目録記載)

宝永六年京版 絵入

刊記「于時宝永六年」丑春月日梓行「出雲寺和泉掾」

半紙判 濃縹色無地表紙 22.7×15.8cm 題箋欠 各巻貼外

題を存し目次を示す、項目及丁数記載、

内題、「驛路の鈴卷一(一五)」單辺 18.5×12.3cm

八行 廿二乃至廿六字位 柱記「驛路鈴」

丁数 三十一、三十五、三十一、三十一、三十四 総百六十  
二丁

挿絵 各巻六頁分、

注、本書浅井了意の東海道名所記と同巧異曲の評あり、挿図

古雅掬すべし

吾婦路記 中本一冊 一二六 35

貝原篤信撰并谷重遠撰 合刻

享保六年京版 絵入

刊記 六角通御幸町西江入町「書林柳枝軒茨城多左衛門」次

に例の如く次丁に「貝原先生編述目次」を置き欄外に「享保

六歳」と記す

美濃半切 青表紙 18.5×12.3cm 題笈欠、

扉題、「往年貝原益軒谷重遠両先生のしるせし道の記両部を

会釋して世の人の見やすからむために袖のか、みとなしぬ同

し往来のくり言は例の世のなすわざにや」吾婦路記」平安城

書林柳枝軒」

單辺 14.5×9.5cm 上下二段 各八行 十一、一文字

柱記「道中記」丁数九十四丁 挿絵 十七面

上段に東下りとして益軒の吾妻日記、下段に西上として谷氏

の東遊草を載す、巻頭享保六年柳枝軒の自序一丁、巻末駄賃  
付等を載せず、

吾妻紀行 半紙本二冊 下冊欠 二九 36

複製歟 其刊年不詳

谷口重以撰 原刊 元禄四年吉文字屋市郎兵衛外三名合板

美濃半切三冊、

半紙判 薄茶横縞模様表紙 22.4×15.5cm

書題笈 内題、「吾妻紀行」絵入

單辺 16.5×12.3cm 八行 十九乃至廿四字位

柱記「吾妻紀行」丁数 上三十一 中廿九 但丁付上中連続

挿絵、各巻八頁分 卷首自序一丁

壬戌羈旅漫録 半紙本三巻三冊原映入 一三六 37

滝澤馬琴撰 渥美坦庵校 原著享和二年成る 川辺花陵、渡

辺小華画

刊記 明治十八年五月出版」著者 故人曲亭馬琴」校訂出版

人 渥美正幹」著者相続人 瀧沢次」発賣人書肆日本橋区西

河岸町十二番地 須原鐵二」

半紙判 焦茶表紙 23.2×15.7cm 絵入

元題笈「羈旅漫録上之巻」内題、「壬戌羈旅漫録卷之上」雙

辺 16.6×12cm 十一行 廿四乃至廿八字位

柱記「壬鞆旅漫録…畏三堂梓」丁数 三十一、四十六、三十

八、挿絵 一、二、四頁分、上巻首に文化九年曲亭序二丁、

下巻尾に享和二年馬琴後記、あり、

原帙は厚紙製、表に扉題様の文言を刷出せり、

注、本書は享和二年五月―八月の上方參宮紀行なり、

(甲斐)

身延のみちの記 大本一冊 四六 38

僧元政撰 寛文三年京版

刊記、寛文三曆発卯孟春日書林村上勘兵衛刊行」(梓付)

美濃判 茶表紙 26.6×17.2cm 本、末二部に分つ

書題簽「身延み記行」とあれども原題簽は他本により「身延行

記」とす、内題、「身延のみちの記」

無匡部 九行 廿字前後 柱記なし

丁数 三十四丁 丁付はのどに在り、序跋なし

南天莊藏印、井上通泰博士朱校、表紙見返に同博士識語あり、

「上、八月十三日発 身延、九月五日江戸

下、九月廿一日発 十月五日関原 往路陳元贊下ト相識ル

注、万治二年八、十月に亘り老母の宿願により京を發し身延

參詣したる紀行、

身延鑑 半紙本三卷三冊 八一 39

撰者不詳 延宝頃の原作歟

宝曆十二年身延山板 絵入(貞享二年原刊西村板)

刊記「宝曆十二壬孟春身延山藏版」身延鑑并絵図 外より

一切出し不申矣」賣所身延中町」波木井織部」

半紙判 青表紙 23.2×15.8cm 題簽、「みのふか、見

(下)」上巻題簽欠、内題、「身延鑑卷之上(中、下)」

上巻首に「身延山根元記序」半丁、下巻尾に「洛陽之沙門」

と署名す 單辺 18.3×13.5cm 十五行 廿六、七字

丁数 十四、十四、十 総三十八丁、挿絵 十四頁分

注、本書度々版を重ねしと見え版下三種を交ふ、体裁亦蕪雜

なり、

身延山圖經 大本一冊 一三四 40

撰者不詳

刊年不詳 身延山藏版

刊記 身延山久遠寺藏版」書林」東洞院通三條上ル町」平楽

寺村上勘兵衛」

大美濃判 縹色紋模様表紙 27×19.2cm 之題簽、「身延山



図経」題辭、二丁 高祖日蓮御影半丁、日蓮和歌 宸翰記、  
繪旨写 十一丁半、身延山図（繪卷）廿四丁 計墨付三十八

丁

（相模）

新編鎌倉志 大本九卷九冊 六五 41

河井恒久纂、松村清之訂、力石忠一補

貞享二年京版 水戸藩撰

刊記 才八巻尾に別段の刊記なけれども 柳枝軒の跋に

「僕聞之已熟、渴思竟望願欲通行諸方以資好事、懇請數四始  
得此本、遂録之梓以廣其傳云、」貞享二年歲次乙丑八月吉旦」

洛下書林」柳枝軒茨木方淑識」とあれば 貞享二年茨城多左

衛門板となす、

大美濃判 茶褐色無地表紙 27.5×18cm

元題箋、「新編鎌倉志」一（一、八）首巻及巻三十七題箋欠

扉題、「魁星印」新編鎌倉志」洛陽書肆 柳枝軒藏版」

首巻は序、凡例、引用書目及総目 才一乃至才八巻は本文、

三方雙辺、版心單郭、20.2×15.1cm 十行、廿字前後 片假

名交り、絵入、

丁数（巻次）四十、三十八、九十、九十四、四十六、廿六、

（順次）

挿絵（頁分）〇 五 九 十一 九 二一

三十八、六十、三十六、計四百六十八丁

七 七 五 五十五頁分

挿絵は社寺を主とし全く人物を描かず、貞享二年人見鶴山序

（漢文六丁半）同元年明帰化僧東皐心越序（漢文三丁）同年

力石忠一序漢文三丁、八巻尾に柳枝軒跋漢文二丁あり、

阿波国文庫、不忍文庫藏印、

注、本書は水戸光圀の命により家臣河井恒久拮据十年 松村

等の援助を得て貞享元年漸く成りしもの、家藏貴重本の一

なり、

（武藏）

江戸砂子温故名跡誌 半紙本六巻六冊 九 42

菊岡沾涼撰

享保十七年江戸版 図入

刊記、享保十七<sub>壬子</sub>歳仲夏吉旦」（以下梓付）江府書林 日本

橋南一丁目」萬屋清兵衛梓刊」

半紙判 紺表紙 22.6×16cm 元題箋（茶色紙）「撰江戸す

なこ」三（四）」巻一、二、五、六題箋欠 貼外題、各巻に

ありて巻数内容地名を示す、但巻五の分欠、

内題、「江戸砂子温故名跡誌卷之一 沾涼纂輯」

單辺 17.8×13.2cm 十四乃至十六行 廿七、八行 平假名

交り 柱記「江府名跡志」

丁数 三十二、三十三、三十三、三十六、四十、三十四、

函数 五 二 三 五 四 三

総二百八丁

廿二

才一卷首享保十七年自序二丁、「峯享保壬子梅天上浣の日、

江都神田誹林崔下菴沾涼叙」卷六尾に自跋漢文二丁、

本書は略正統なる地誌の始として後世に至るまで尊重せらる、

注、本書と同一形式の刊記を以て「藤木久市板」「若菜屋小

兵衛板」あり、版の先後比較し難く之を明かにするを得ず、

續江戸砂子温故名跡誌 半紙本五卷五冊 一七四 43

菊岡沾涼撰

享保廿年江戸版 函入

刊記 享保二十年卯正月日「作者 菊岡沾涼」彫工 吉田平

兵衛「江戸芝浜松町二丁目」藤木久市梓刊」

半紙判 紺表紙 22.8×16.4cm 元題箋、「拾続江戸砂子一

(二一五)」貼外題、前書の如く全巻に存す、扉題なし、

内題、「続江戸砂子温故名跡志卷之一 菊岡沾涼纂」

單辺 18.2×13.4cm 十四行 廿七、八行 平假名交り

柱記「続江戸砂子」丁数 三十六、三十五、廿八、三十一、

廿六、総百五十六丁

享保廿年自序漢文二丁、每巻目次あり、巻五末門人の記録せ

るものとして、「江戸名勝志」の著者の批難に対する弁明の

言を記す、三丁、

注、本書に同一刊年にて万屋清兵衛板、あり、又藤木久市板

の求板後摺として、若菜屋小兵衛板或は須原屋伊八板あり、

再校江戸砂子温故名蹟誌 半紙本六卷八冊 七一 44

菊岡沾涼撰 丹治恒足軒校 冬涉訂

明和九年、現刊藤本板を求板再摺、(須原屋)

刊記、原刊記をそのま、残し之に求板者名を追記す

明和九壬辰年「藤本久市梓」須原屋伊八藏」

半紙判 白厚地表紙 23.4×16.3cm

元題箋、「再校江戸砂子(地名)一(二一六)」

内題、「再校江戸名所温故名蹟誌卷一」

巻冊別、卷一…才一冊 卷二…才二冊 卷三…才三冊 卷四…

才四、五冊 卷五…才六、七冊 卷六…才八冊、單辺 23.3

×16.2cm

十六行 廿五、六字 平仮名交り 柱記「再校江戸名跡志」

丁数(函数) 四十一(五) 四十六(三) 四十一(三) 五十四

(四) 六十三(四) 四十一(三) 総二百八十七丁(廿二函)

本書求板と云へども版面精良なり、

本書は沾涼の旧本に対し宝曆中恒足軒校正を加へ、後明和中

俳人冬涉訂正したるもの、依て旧本は享保度の江戸誌、本書

は明和の夫れなること留意すべし、又之により江戸中期地誌

として完璧なるを得たり、

新編武藏風土記稿 零本半紙本八卷三冊 一八六 45

江戸幕府編纂局撰

文化初年大学頭林衡の建議により同七年着手、問宮士信等数

十名十五年を閲して文政七年成る、二百六十五卷、家藏本は

その内 久良岐郡全部卷七十三より卷八十に至る三冊なり、

刊記 明治十七年四月十六日出版版權届「内務省地理局出版」

発兌人 近藤圭造「根岸武香」

半紙判 活版 丹表紙 22.9×16.4cm

雙辺 十五行 三十六字

丁数 才一冊：卷一—三、五十二丁 才二冊：卷四—六、四

十六丁 才三冊：卷七—八、三十八丁、

注、本書武藏の地誌として細大洩さず、今日に至るも企及す

るものなし、

墨水遊覧誌 大本一冊 一六〇 46

北野菊塙撰

刊年不祥 文政十一年とあり(高木、地誌目録)

刊記、「花屋舗藏板」

美濃判 紅花色表紙 25.7×17.4cm

元題筭、「墨水遊覧誌」扉題、「春秋花庵菊塙撰、すみだ川遊覧

誌、花屋舗藏板」

雙辺 18.8×13.7cm 十一行 平仮名交り 墨付廿八丁

江戸向島に百花園を経営する著者、附近名所古跡を記し雅客

の詩歌を編す、

江戸遊覧花暦 大本四卷三冊 二〇七 47

岡山鳥撰 長谷川雪旦画

天保八年江戸版 絵入

刊記 天保八年「西春正月発行」書肆「江戸日本橋通七丁目」

須原屋茂兵衛「同浅草茅町貳丁目」須原屋伊八

美濃判 黄土色紗綾形模様表紙 25.8×18.3cm

元題箋「江戸遊覧花曆春（夏秋冬）巻一（二三四）」扉題「岡山鳥  
著編、江戸名所花曆春夏秋冬、長谷川雪巨画」

内題「江戸遊覧花曆巻之一（二一四）」

單辺 18.9×13.7cm 十一行 廿四字前後 平仮名交り

丁数（巻次順）三十三 廿二 十五 十七 総八十七丁

挿絵（頁分） 十九 十二 六 八 四十五頁分

注、本書原題は「江戸名所花曆」、原刊は「文政十年江戸守

不足齋藏板」とあり、（高木、地誌目録）別に天保六年版、

明治廿六年版あり、

補、初巻首岸本由豆流（楳園）の序一丁あり、

別本江戸名所花曆 半紙本四巻四冊 三〇 48

岡山鳥撰 長谷川雪巨画

明治廿六年、天保八年板の求板後摺

刊記、天保八年酉年春正月発行「明治廿六年十二月廿六日印

刷発行」発行 大橋新太郎 発兌書林 日本橋区本町三丁

目 博文館

半紙判 青色浪千鳥空押表紙 23.1×15.7cm

元題箋「江戸名所花曆 春（夏秋冬）」見返に扉題あり

内題、題箋に同じ、匡郭、行数、丁数 総て前書二〇七に同

じ、巻一首に、竿斎道人漢文序一丁 及 岸本由豆流序一丁、  
渡辺千秋藏印

江戸繁昌記 半紙本五篇五冊 四一 49

寺門静軒撰

天保三年より毎歳一篇新刻、同七年に至る、初摺

刊記、見返扉に（青色重郭）静軒居士著、（二五篇）「江戸

繁昌記」克己塾藏板」（上欄外に）天保三（四一七）年新

鐫一

半紙判 薄青色表紙 22.3×15.6cm

元題箋「江戸繁昌記三（五）篇」初、二、四篇題箋欠

内題「江戸繁昌記」篇次なし

單辺 15.9×10.9cm 有界 十行 廿字 漢文

版心、魚尾、丁数のみ、丁数 四十三、四十二、四十二、四

十二、四十二、

内容、相撲 芝居 烟火 吉原等當時の世相を主題とせる風

俗誌にして描写詳細を極む、

注、イ、本書に才六篇ありて「江戸繁昌後記、青楼之巻」と

称すといふも未見、

ロ、天保六年三月本書初篇及二篇に付發賣を禁止せらる、

同十三年右処分として静軒は「所持の書物及板木取上げ武家奉公構」となり、賣捌丁字屋平兵衛は所拂、扱店（やく）雁金屋は過料十貫文、板木師五貫文にて落着、静軒この爲明治に至るまで廿七年間寄宿の生活を送る、(朝倉治彦、東洋文庫、江戸繁昌記解説) イロ共、

別本江戸繁昌記 半紙本六篇六冊 三九 50

初篇より五篇まで五冊は、原刊の求板後摺にして書誌殆前書、四一に同じ、唯異なる所は、一、初篇見返に扉題なし、二、二篇見返に、天保四年新鑄とすべきを五年と誤る、三、版面磨滅甚しく紙質亦宜しからず六篇、題箋「繁昌記 六篇」内題「繁昌後記 初篇、蓮湖浪人静軒居士著」其他書誌殆五篇までと同じ、内容、地獄遍歴に寄せて天保の改革を批判す、

刊年、見返に扉なく不明、なるも 内題に「浪人静軒」とあれば天保十三年以後の原刊歟、又朝倉解説に依れば「後記初篇」は明治十年東京奎章閣稲田平吉板とあるも 題箋、内題共に一致せず、後考を俟つ、

東都歳時記 半紙本四卷五冊 七四 51

齊藤月岑撰 長谷川雪旦、同雪堤画

天保九年江戸版 絵入

刊記 才五冊尾に、東都齊藤月岑幸成編纂「同長谷川雪旦自

画」男松齋雪堤補画「天保九戊戌孟春発行」書賈「江戸日

本橋通壺町目「須原屋茂兵衛」同浅草茅町式町目「須原屋

伊八」合梓」

半紙判 薄青色向鶴模様空押表紙 23.1×16.4cm

元題箋、「東都歳時記春上(春下、夏、秋、冬) 一(一五)」

内題、「江戸歳時記卷之春春之部」

初冊見返に、「天保丁酉新鑄 東都歳時記、全部五卷」

單辺 183×132cm 十一行 廿八、九字前後 平仮名交り

柱記、「東都歳事記」

丁数(冊順) 廿八、廿四、三十四、三十六、三十六、総百五

十八丁

挿絵 十六、廿一、廿九 三十五、廿七 計百廿

九頁分

卷首天保三年市河米庵漢文序一丁半、同七年日尾荆山漢文序

三丁半、同三年撰者提要一丁半、各巻初に荻生徂徠の詩一首

半丁、才四巻末尾刊記に次で「三都発兌書林」半葉を添え

書肆名十三を記す、

(東山道)

(下野)

晃山勝概 半紙本三卷三冊 一八七 52

錦石秋撰

無刊記 明治廿年日光金魁堂刊(他本に依る)

半紙判 薄藍色表紙 22×16cm

書題箋「日光山勝概 壹(一、二、三)」

内題「晃山勝概卷之一(一、二、三)」雙辺 木活字 十行 廿

三字 平仮名交り 絵入

丁数 七十一、九十、七十二丁、挿絵 十八、四十七、廿四

頁分、

日光名勝記 小本一冊 九二 53

貝原篤信撰

享保六年 原刊正徳四年板の後摺

刊記 卷末に、原刊の刊記を残し 梓付、

六角通御幸町西へ入町「正徳四年孟春吉旦」茨城多左衛門

板行「次に「貝原先生編述目次、書林柳枝軒藏版」半丁あ

りて「享保六歳」と記す

半紙半切 藍色表紙 16.4×11.2cm 題箋欠、

扉に、「益軒貝原先生記、日光名勝記、洛陽 柳枝軒藏版」

内題「東路之記」單辺 13.7×9.8cm

各頁上欄(三分一頁)を挿絵とし、下部本文八行 十一、二

字位 平仮名交り 墨付四十八丁 内目錄半丁

柱記「あつま記」卷末に「貝原篤信記」と署す、

(上野)

伊香保志 半紙本三卷三冊 一一五 54

大槻文彦撰(秋萍)

明治十五年東京版 絵入

刊記「編者秋萍居士」補助木暮楽山「畫工長命晏春」筆者大

月栖霞「剗腕工佐々木熊二郎木戸小太郎」發兌神田淡路町

國文社」

次丁、「明治十四年四月十二日版權免許」同十五年十月一

日發兌「編輯人大槻文彦」出版人竹中邦香」

半紙判 薄藍地藏書印空押表紙 22.8×15.3cm

元題箋「伊香保志卷一(一、三止)」内題、「伊香保志上巻」見

返(黄紙)「伊香保志」欄外に「明治十五年壬子四月新鐫」

扉「伊香保温泉志」

雙辺 16.7×12.6cm 十行 廿三乃至廿六字位 平仮名交り

柱記「伊香保志―天香楼藏粹」

丁数 四十一、三十六、四十四、総百廿二丁 丁付、各丁裏のどに附す

挿絵 卷一、十頁地図一、卷二 十四頁地図一、卷三 古文

書影写十一図

卷一首に、県令楫取素彦題字二丁、明治十二年秋萍題詩二丁、同十三年撰者序三丁、引用書目一丁、伊香保道中記十五丁の後 本文に入る、本文は伊香保の地理、歴史古今に渉る、詳細なり、

(信濃)

木曾路の記 中本二卷一冊 九三 55

貝原篤信撰

正徳三年京版 宝永六年原刊本の自店後摺

刊記 卷末に原刊々記を残す、即ち

(粹付)「京六角通御幸町西へ入町」書林茨木多左衛門板行」

次で「木曾海道宿付」一丁半の末尾欄外に「正徳三年孟春

新版」(陰刻)と記す

美濃半切 藍色表紙(改装) 18.4×12.6cm

書題簽(中央)「きよ路の記」

見返に扉(重郭)「此書江戸より武藏上野信濃美濃近江五ヶ国の道路を記せり、東山道の内下野陸奥出羽の事は道筋に有されは記されすしかれとも又東山道記ともいふへし」岐蘇路

記」貝原先生著 京師 柳枝軒」内題、「木曾路之記上 貝

原篤信記」

單辺 13.8×9.8cm 八行 十六、七字位 平仮名交り

柱記「木曾上(下)」墨付百四丁 挿絵 十七頁分

巻首に宝永六年自序五丁 卷末に同年撰者後叙二丁半、本文は貞享二年撰者江戸より中山道を経て京に至りし紀行、

なり、

別本木曾路之記 中本二卷一冊 二五四 56

貝原篤信撰

萬延元年京版 宝永六年原刊の求板後摺

刊記 卷末奥付 藏板廣告の末に「皇都書林、六角堂前、丁

字屋源次郎板元」更に次頁発兌書林九名の首に「萬延元年

庚申季夏再刻」又卷末木曾海道宿付の末に前板刊記「正徳

三年孟春新版」を残す

美濃半切 薄鼠表紙 1.8×12.6cm 元題簽(左肩)「木曾路

之記」見返の扉の形式文言前書九三に同じきも書肆名「京師

柳枝軒」を削り「平安書林正寶堂藏版」と入木す

内題、匡郭、寸法、行数、柱記、丁数、前書に異ならず

巻末、茨木多左衛門の原刊記を削る、

眞澄遊覧記

眞澄遊覧記刊行会（柳田国男）影印 昭和四、五年刊

菅江眞澄撰

一、わかこ、ろ 半紙本一冊 一二五A 57

半紙判 茶表紙 20.5×15.2cm 無匡郭 十二行 墨付 廿

五丁 挿絵 二図

天明三年春より秋にかけ信濃城捨紀行を記す

二、來<sup>く</sup>目<sup>め</sup>路<sup>ぢ</sup>の橋 半紙本一冊 一二五B 58

半紙判 茶表紙 寸法右に同じ 無匡郭 十二行 墨付 四

十三丁 挿絵 八図

天明四年夏 信濃洗馬村より越後うしろ洲に至る行程、を記

す

三、奥<sup>う</sup>の手<sup>て</sup>風<sup>ぶ</sup>俗<sup>ぶ</sup> 半紙本一冊 一二五C 59

半紙判 茶表紙 寸法右通り 無匡郭 十二行 墨付三十六

丁 挿絵 六図

寛政六年正月より奥州田名部を過ぎ 三月鳥刺山に登る紀行  
を記す、

註、右刊行会は本遊覧記として猶「伊那の中路」一冊を影印  
刊行せるも入手するに至らず

（北陸道）（越後）

北越雪譜 大本七卷七冊 一六九 60

鈴木牧之撰 岩瀬京山刪定 同京水画

初編三卷 天保七年江戸大坂合板 絵入

刊記 卷下末「天保七<sup>丙</sup>申年九月発兌」書肆「大坂心齋橋筋

博勞町」河内屋茂兵衛「江戸小傳馬町三丁目東側」丁子屋

平兵衛寿粹」

美濃判 雪降模様表紙 25.8×18.2cm

元題笈、「北越雪譜初編上之卷（中、下）」

見返に扉題、「越後鈴木牧之撰、江戸京水百鶴画」京山人百

樹刪定」北越雪譜初編三卷」江戸書肆「文溪堂梓行」

單辺 20.8×15.2cm 十一行 三十四乃至三十七字前後 平

仮名交り 版心「雪譜卷之上…文溪堂藏」

丁数 三十一、三十四、三十二 総九十七丁、挿絵、十四、

十、十一、総三十五頁分



天保六年京山漢文序二丁、京水序半丁、

後編四卷 天保十三年江戸大坂合板 絵入

刊記 卷四末「天保十三年」壬寅孟春「全志発行書林」大坂

心齋橋通北久太郎町「河内屋喜兵衛」心齋橋博労町「河内

屋茂兵衛」江戸小傳馬町三丁目「丁子屋平兵衛藏版」

美濃判 雪結晶模様表紙 寸法同じ

元題箋、「北越雪譜 二編 夏(冬)」卷一及三題箋欠

卷一見返に扉題「北越雪譜<sup>三編</sup>四卷」越後鈴木牧之撰「江戸京山

人百樹増修」京水百鶴畫図「天保辛丑新刻」書肆 文溪堂発

販」注天保辛丑は十六年、

製本寸法、匡郭、行数、版心、総て正編に同じ

丁数 三十四、三十三、廿四、廿 総百十二丁 挿絵、十四、

十、五、九 計三十八頁分、天保十一年京山漢文序三丁

本書は越後秋山郷居住の撰者、多年苦心の劳作、其発刊に至

る苦心談、馬琴、京傳、京山、京水との錯綜せる経緯興味津々

たるを覚ゆ、

注 本書後に萬笈堂の求板後摺本あり、

(西海道)

(肥前)

長崎夜話草 半紙本五卷五冊 三五 61

西川如見撰 (名忠英)

享保五年跋により 同年刊京版

跋及刊記「享保庚子孟春吉旦 西川正昌書於省雲齋」「京六

角通御幸町西入町」茨城多左衛門繡梓」

半紙判 紺無地表紙 22.4×15.6cm

元題箋「長崎夜話草二」「長崎夜話草四<sup>孝子貞婦清民</sup>」「長崎夜話

草五<sup>附録</sup>土產三十九種」卷一及一題箋欠、

卷一見返に扉題、「崎陽西川先生著、長崎夜話草、平安城書

林柳枝軒藏版」

内題、「長崎夜話草一、長崎 西川正休編輯」

單辺 18.1×32.4cm 十行 十八乃至廿二字位 平仮名交り

柱記、「長崎夜話一(一―五)」丁数 廿六、廿、十八、廿六、

十四 総百四丁

卷一首自序一丁、「己亥太呂崎江釣渕子書於求林齋」、目錄三

丁、卷五末、享保五年西川正昌後叙一丁、

猶、刊記の次に「崎陽求林齋西川先生撰述平安柳枝軒刊行」

半丁ありて 著書十三部を記す、

注、如見は長崎訳官、享保九年卒 年七十七、

西游日簿 写中横本一冊 複一二二 62

稀書複製会才四期複製 大正十五年刊

春木南湖撰并画 白筆稿本

大美濃半切 薄茶表紙 14.2×20.2cm 題箋、(紅紙)「西游

日簿」

本書の原本は卷首十三葉蠹蝕汚損烈しきため之を活版四葉に抄写し、写生図も描線分明ならざるを以て之を省く、十四葉以後墨付五十四葉を玻璃版影印す、行数不同、片假名交り、臨写或は彩色素描せる風景器物極めて多数を存す、

南湖は南画を良くし、天明八年秋大坂を發し長崎に遊びたる紀行日記なり、卷首に男南溟筆南湖肖像を添ふ、

長崎聞見録 大本五卷五冊 三八 63

廣川解撰

寛政十二年京版 絵入

刊記 寛政十二年庚申九月「京都書林」林伊兵衛「林喜兵衛」

藤井孫兵衛「大坂書林」浅野弥兵衛「森本太助」岡田新治

郎」

美濃判 紺地鳳凰菊花模様表紙 25.5×18cm 元題箋 卷一

(白紙)「長崎聞見録 長」、卷一―一五(黄紙)「長崎聞見録」

(三一五)内題「長崎聞見録卷之一(二一五)」

單辺 18.9×13.5cm 十行 三十乃至三十五字位 平仮名交

り 版心「長崎聞見録(卷) (丁)」

丁数 二一、一八、一七、一七、一六 計八九 插图多数

「卷一首に寛政九年自序一丁半」「寛政丁巳初春平安廣川解」

内容は著者寛政初年長崎に数年滞在したる際の見聞に依る、按ずるに右卷一を卷二以下に比するに、題箋のみ異り、表紙紙質印面等毫も異なることなし、依て同版と見るべき歟、注、高木利太編 家藏地誌目録に依るに寛政九年 大坂 河

内屋源七郎板 を載す、自序の年紀より見て或は此を原板とすべき歟、尤も高木本には「長崎見聞録」とあり、

長崎行役日記 大本一冊 二四五 64

長久保赤水撰(名玄珠) 明和四年成る

文化二年 三都合版 絵入

刊記 文化歳在乙丑孟春「製本書肆」東武本石町四丁目「小

倉仁兵衛」京都「一條富小路林伊兵衛」御幸町御池藤井孫兵衛」

攝城心齋橋唐物町森本太助」同安堂寺町田邑九兵衛」高麗橋

一丁目浅野弥兵衛」

美濃判 単地布目模様表紙 26.5×18.3cm 元題箋「標註長

崎紀行水戸赤水先生記」内題「長崎行役日記」

單辺 21.7×15.3cm 十行 十八乃至廿二字位 平仮名交り

柱記「長崎行役日記」各丁三分一程上欄を設け 細字にて註

記を施す、墨付八十一丁 挿絵 十七頁分

巻首文化二年奥田元繼漢文序三丁「文化二年乙丑夏四月穀旦

播州奥田元繼題於浪華拙古書堂」巻末に「明和四年丁亥冬十

一月常州水戸長玄珠記」と署す、

本書は水戸藩の外国漂流漁民引取の爲明和四年春夏の交 水

戸より長崎へ出張したる紀行の詳細なり、

赤水、水戸侯侍讀、經史詩文に長じ最も地理学に究しく著書

亦多し、享和元年歿、

長崎土産 半紙本一冊 一〇65

磯野文齋著并画

弘化四年長崎版

刊記 江戸溪齋池田英泉「義信門人」文齋磯野信春著并画「

浄書赤松霍洲」副刷江戸石上松五郎郎「唐紅毛小間物御土

産之品数品 長崎画図吳国人物錦絵下直奉指上矣」弘化四

丁未年春正月發兌「長崎今鍛冶屋町角」大和屋由平寿梓」

半紙判 縹色無地表紙 22.8×15.8cm 元題簽「長崎土産

全」(文字朱色)

扉題(魁星印)「文齋著并画」長崎土産全一卷」崎陽書房

大和屋正舖上梓」

單辺 九行 廿六、七字前後 平仮名交り 墨付四十丁 序

其他七丁 地図及書図十五丁 本文十八丁

本書は江戸期以来 その内容の珍奇なると長崎版たること、

により一般に甚しく珍重せらる

(南海道)(紀伊)

通念集 大本十一卷十冊帙 複六三 66

一無軒道治撰

昭和七年 高野山金剛峯寺複製藏版

無刊記 寛文十二年刊推定 撰者序の年代による

大美濃判 濃藍地輪違模様表紙 26.9×19.6cm

題簽「野通念集奥院一(二一十)」内題「通念集」

原帙は布貼製題簽付

冊次 一 二 三 四 五 六 七

卷名 奥院 壇上 千年院 本仲院 往生院 谷上 南谷

丁数 四七 二九 四八 六一 五五 二九 二七

插图 一〇 六 一四 一〇 八 六 四

(頁分)

八 九 十 一〇冊

西院 天野 慈尊院

二六 三二 三〇 三八四丁

六 一四 一二 九〇頁分

單辺 21.5×15.6cm 十一行 十七乃至廿二字前後 平仮名

交り

寛文十二年自序 二丁 毎卷首目次あるも元來卷次の明記無し

本書は野山の地誌並びに歴世高僧の功業真言一宗の興廢変遷を記するもの、

野山名靈集 大本五卷五冊 二四 67

釋明有撰 等我画

宝曆二年高野山金剛峯寺版 絵入

刊記 宝曆歲舍壬申南呂望日此刻以収 高野山青巖寺之經庫

者 装釘所高野山經師伊八

大美濃判 薄青無地表紙 26.2×19.1cm 元題簽「野山名靈

集才一(二一五)内題「野山名靈集卷才一(二一五)」

無匡郭 但插絵は有郭 十一行 廿三、四字前後 平仮名交

り

卷次 一 二 三 四 五 計

丁数 四二 四七 五六 三八 三五 二一八丁

插图 一四 一四 二八 六 一二 七四頁分

「宝曆 壬申歲十二月金紫光録大夫源實雅撰」の漢文序 一丁半

及び「宝曆二年三月石州の愚禿明有泰圓洛下の寓居に書」の

自跋 一丁半、

注、本書はその内容 野山の寺記と云ふに庶幾し、

## 汲古儲藏志 卷六

### 名所圖會・繪圖

#### 五、名所繪、繪圖

(全國)

日本山海名物図會 大本五卷五冊 二二六 1

平瀬徹斎撰 長谷川光信画

寛政九年大坂高木嘉藏求板 (原刊宝曆四年千種屋新右衛門

〔大坂平瀬氏〕板)

刊記 畫工 松翠軒長谷川光信「宝曆四年甲戌初夏吉日」寛

政九年丁巳初春求板「平瀬徹斎撰」浪華「書肆」高木嘉藏

梓」大坂心齋橋南久宝寺町」山本長兵衛」

注、山本長兵衛、塩屋、は本書賣出店也

美濃判 藍地重山浪千鳥空押 紫横線数段入表紙 25.4×18.2

cm 元題簽「日本山海名物図会 一(一一五)」

目録題「日本山海名物図絵目録」内題なし、

單辺 19×14.1cm 行数不同 毎行三十五、六字前後 平仮

名交り 柱記「山海名物図絵一(一一五)」

巻次 一 二 三 四 五 計

丁数 二五 一六 一九 一六 一七 九三丁

画図 三五 三二 三六 三三 三三 一六九頁分

巻一首に宝暦四年半時庵序二丁、平瀬光望跋三丁 次に全巻

の目録三丁半 以下本文なり、本文は畫図半丁又は見開を以

て一項となし、画図の右方を区郭して本文説明を載す

巻五尾に「泰文堂藏刻製本目案」大坂書林心齋橋通南久太良

町 塩屋長兵衛」一丁を添付し、書名廿六部を載す

内容は採鑛より捕鯨まで諸國の物産を图示して之に説明を加

へたるもの、

注、泰文堂塩屋長兵衛は、その住所 南久宝寺町より、北久

太良町、南久太良町と移れりと見ゆ、

日本山海名産図会 大本五卷五冊 二三五 2

木村孔恭撰 葦関月画

寛政十一年 大坂版

刊記 畫図法橋関月」寛政十一」未年正月高木遷喬堂梓」浪

花書肆」心齋橋筋北久太良町」塩屋長兵衛」

美濃判 藍地重山水波模様空押、紫横線数段入表紙 25.8×

18.3cm 元題簽「山海名産図会一(一一五)」

内題「日本山海名産図会卷之巻(一一五)」

單辺 21.1×15.3cm 十三行 廿八字前後 平仮名交り

柱記無し 丁付は毎葉裏のどに「ノ」の如く記す

巻次 一 二 三 四 五 計

丁数 一六 四二 三〇 三八 三二 一五八丁

画図 一四 三六 二九 三八 三〇 一四七頁分

才一卷首に寛政十年木村孔恭序(漢文) 三丁「寛政戊午臘月

上浣木村孔恭識」巻五末に寛政十年同氏跋あり、

本書内容は全国に亘る特産物を图示して説明を附したるもの、

注、本書撰者名を明記せず單に画名のみを記す、然れども兼

葦堂の序跋により明かなり、蓋し寛政九年に歿せし亡友関月

に花を持たせ自らを秘したるもの歟

高木遷喬堂は 高木嘉藏ならん、書賈集覧、新增共に見えず

東海木曾兩道中懷寶図鑑 小本一冊 一一二一 3

天保十三年江戸須原屋茂兵衛刊

刊記 天保十三年壬寅正月吉日「日本橋南菴丁目」須原屋茂

兵衛藏」

半紙半切 薄鼠宝亀模様空押表紙 15.8×10.9cm

元題箋「東海木曾兩道中懷寶図鑑」單辺 13.2×9cm

毎頁上下二段に分ち 上辺東海道、下辺木曾海道の絵図を描き、毎丁見開を一宿として図示す、

丁付は毎丁表ののどに存す 総七十五丁、別に口絵として琵琶湖風景見開図を附す、巻末 兩道中駄賃付等あり、

諸國順覽懷寶道中図鑑 小折本一帖 六三 4

天保十一年江戸須原屋板

刊記 天保十一年庚子孟春再刻發兌「書肆」大坂九之助橋

秋田屋良助「日本橋通一町目」須原屋茂兵衛」

小形折本 薄藍色表紙 15.7×7.5cm

元題箋「諸國順覽懷寶道中図鑑」單辺 総十七折

両面刷、表は東海道、大坂、長崎、伊勢、大和路等、裏面は木曾路、奥州 松前、北国筋 日光、道中等、

絵図、挿絵多数、色摺

里程、駄賃、道中案内等簡略に示す、

早引浪花講定宿図會 小形折本一帖 一一九 5

大坂定宿 松屋源助編

京都定宿 松屋吉兵衛刊

刊記 京都浪花講定宿「三條御幸町北へ入町」松屋吉兵衛」

小折本 茶地花模様空押表紙 21.4×8.3cm

元題箋「日之丸扇印早引浪花講定宿図會」單辺 全国定宿絵図両面刷 色摺、総廿二折

巻首に 浪花講の看板を図示し 其の下に講の規定を記すこ

と左の通り、

「口述」諸国道中筋定宿并定休所々此通り之木札之「かんばん掛置申矣是を目当に御泊り可被成允諸事実意ニ」御世話申賣女飯盛等決而す、め不申これ当講の矩定也「御安心被下御泊可被成矣万一右かんばん有之方にて廉略之儀有之」矣は、其宿の名前を御記し被下以書面大坂松屋源助方」まで御しらせ可被下早速相札し定宿相改可申矣 已上

(畿内)

都名所図會 大本六卷六冊 五七 6

秋里籬鳥撰 竹原春朝齋画

安永九年 京 吉野屋爲八板

刊記 卷六末尾、

浪花畫工 春朝齋竹原信繁「彫工」京壬生村住「永島六右衛門」安永九年子中秋「書林」京寺町通五條上ル町「吉野屋爲八梓」

大美濃判 薄鼠色無地表紙 23×28.7cm 元題簽「都名所

図会平安城」卷二以後題簽小書 左青龍、右白虎、前朱雀、

後玄武 但し卷六は書題簽なり、

目錄題「都名所図会卷之一目錄」

單辺 21.5×16.2cm 十三行 三十七、八字前後 柱記なし

丁付は每葉裏のどに記す

卷次 一 二 三 四 五 六 計

丁数 四三 五一 八五 六七 七六 五四 三七六丁

画図 四八 五八 九五 七二 八五 六八 四二六頁分

卷一首に、安永九年五條爲俊序二丁半、卷六尾に 同年湘夕

漢文自跋一丁半、

本書は通俗名所図会の嚆矢をなすもの、甚時好に投ず、

卷一及二は内裏及その周圍、卷三東山方面、卷四西山方面、

卷五南郊 卷六北山方面を記す、

注、本書、天明七年吉野屋再刻板存す

拾遺都名所図會 大本四卷五冊 五八 7

秋里籬鳥撰 竹原春朝齋画

天明七年 大坂 河内屋太助外二店刊

刊記 天明七年未秋新板「京都書肆」二條通富小路東江入「

須原屋平左衛門」東高瀬筋正面上ル丁「俵屋清兵衛」浪華

書肆「心齋橋通唐物町南江入」河内屋太助」

大美濃判 薄鼠色無地表紙 25.8×28.3cm

元題簽 卷一「拾遺都名所図会平安城」、卷二以後「左青龍、左

青龍、後玄武、右白虎、前朱雀」

單辺 21.3×16.1cm 十三行 三十五、六字前後 柱記無し、

卷次 一 二首 二尾 三 四 計

丁数 六一 五一 五二 五九 七六 二九九丁

画図 四九 五七 六一 六〇 八六 三二四頁分

初卷首天明七年鷲尾隆建序 漢文一丁半、卷四末天明六年湘

夕自跋 漢文一丁半、天明七年春朝齋跋二丁、

本書の体裁は本篇と全く同一、本篇に漏れたるを補ふ、

注、春朝齋、本姓松本氏、大坂大岡春卜門人、安永寛政の絵

師、

都名所三十景 横大形折帖一冊映入 一五 8

長谷川貞信画

大坂 綿屋喜兵衛板

刊記 各画面匡郭外に「大坂綿屋喜兵衛梓」

題名「都名所」貞信画

横形画帖 黄色紋繪子地表紙 20×27.8cm

金箔散し書題箋、中央、「都名所三十景淡古書」

画面匡郭寸法 15.8×20.6cm 横画 総三十面 極彩色版画

画題を列記すれば、左の如し、

御室仁和寺花盛 伏見稻荷社 梅尾門前雨中 嵐山三軒家眺

望 如意嶽大文字 吉田山神泉閣 愛宕山之図 北野天満宮

境内 祇園社西門 東福寺通天橋 三十三堂後堂 真如堂楓

林 廣沢池秋月 高雄奥院庭中 円山安養寺夜景 比叡山湖

水遠望 黒谷金戒光明寺 高台寺秋景 島原光景 智恩院本

堂 妙心寺雲水松 龍安寺雪曙 南禪寺大燈炉 金閣寺雪景

音羽山清水寺 西大谷月鏡橋 四条橋河原夕涼 四条橋より

繩手通 三条大橋 祇園大鳥居

本版画は元各画面を半折して同質の紙を表紙として綴ちて冊

子となし しかも題箋なし、見る影もなく荒れたるを 昭和

廿八年神田大屋書房に見出で、購ふ、更に心安き南陽堂の楠  
林老人に頼みて 宮内省用達の表具師に依り画帖に仕立てつ、

注一、長谷川貞信、文化六年生 明治十二年歿 七十一歳

名文吉 後徳兵衛、号を緑一斎 信天翁 南窓樓 雪花園

大坂安堂寺町難波橋筋に住む 役者絵美人画あるも名所風

景画を以て知らる 都名所写真眞鑑 浪花百景 大坂名所

画を上田公長又貞升に学び法眼に敍せらる 作画は、天保

より明治に及ぶ 子小信 名徳太郎 嘉永元年生 明治九

年父隠居して二代目貞信となり 役者絵を主とす

注二、綿屋喜兵衛、大坂御池通二丁目又北堀江二丁目 後心

斎橋筋塩町角に在り 前田氏 金隨堂 享保より明治に至

る 小説 絵草紙の出版鈔からず

丹後國天橋之図 大折本一帖紙帙付 五九 9

貝原篤信撰

正徳年間 京都 茨城多左衛門板

無刊記

益軒日本三景図の一、(橋立、吉野 厳島) 大判折本装

絹浅黄無地表紙 30.3×17cm



元題箋 紅紙飾粹付「丹後国天橋之図」 見返 金箔散し、

巻頭採處散人題字三丁 丹丘の野盤僧亡名子序一丁「丹後与

謝海天橋立之図」として現宮津湾の風光鳥瞰図 版刻 手彩

色 六丁 全長二、〇三米、次に「丹後与佐海名勝略記」十

四丁 本略記は單辺 每半葉十二行 毎行廿三乃至廿六字位

平仮名交り

紙帙は彩色絵具模様を描き 大なる貼外題「天橋立図」を附

す

本畫図 絵図の美を以て甚しく世に珍重せらる

注、日本三景の一、松島図は佐久間容軒撰并画にて享保十三

年 右橋立図と同型に柳枝軒より発刊、

和州芳野山勝景図 大折本一帖 六〇 10

貝原篤信撰

正徳三年 京 柳枝軒板

刊記 巻中「名勝考」末尾餘白に黄紙に版刻して貼付、

「一、右吉野山図一卷者貝原先生所著也 先生嘗」巡遊彼

地數回手自描其所見而令画工模写之藏」匡笥久矣不俟屢乞

得之今又淨写之以鏤梓」

一、又有一図所藏名山之秘府而凡彼地之勝景所以可図者

唯片名寸丹悉慕不滿可謂盡美矣不俟亦」頗乞得之遂合先生  
之図以公于世人之帶一本則」彼地佳境居然可知焉」

一、操先生所作之大和巡覽記中所聞彼地之詞置図」之前後

以代序跋也先生今歲八十有四攷々而未」倦所謂過其寿者也

其書之丁寧詳宜哉」正徳三癸巳歲五月良辰」平安城書肆

柳枝軒 茨城信清謹誌」

大形折本 茶表紙 29.2×16.8cm 書題箋「吉野山名勝考」

次に吉野山全山図 版刻 手彩色 八丁 彩色図全長 二、

六五米

次に「吉野山名勝考」七丁半 この末尾に刊記半丁 次で益

軒跋二丁半「正徳癸巳年八十四翁貝原篤信記」

名勝考本文は單辺 29.2×16.8cm 十二行 廿七字前後 平

仮名交り 跋は十一行 廿五、六字

本書は古く改装したりと見え 或は錯乱あるかも知れず、

高木氏家藏地誌目録によれば、本書は 序文、絵図、名勝考

の排列なりと云ふ、家藏書の益軒跋は或は序文か、檢討を要

す

攝津國有馬山勝景図 中形折本一帖 九九 11

橘守國撰并画

寛延二年 大坂 大野木市兵衛板

刊記 寛延貳歳<sup>己</sup>孟秋吉旦「書肆」大坂心齋橋安堂寺町」

大野木市兵衛」

中形折本 亀甲地丸<sup>七</sup>に梅松模様表紙 22.2×13.8cm

元題箋 中央「摂津国有馬山勝景図」

題字一丁 有馬山温泉全景鳥瞰図 版刻 手彩色 三丁、

「有馬山温泉由来、神社佛閣等」七丁半

右由来本文單辺 19×13.5cm 十行 三十一字前後 平仮名

交り、

注、本図には天明二年、寛政十二年の求板後印あり

有馬六景 大本一冊 一五〇 12

河上維萋撰 狩野永良画

明和七年 私版(歟)

無刊記

美濃判 薄浅黄地筆彩菊花図模様表紙 25.7×17.8cm 元題

箋「有馬六景」

雙辺 内法 17.7×13.3cm 七行 十六、七字前後 平仮名

交り

六景画図及詩歌は薄藍刷 七丁

その前に、明和七年日夏典貞序七丁、後に同年松岡雄淵跋

漢文三丁

内容は有馬山六景の画図に之を詠じたる貴紳の詩歌を添へた

り、有馬三社に奉納せりとして色刷を以て名あり、

繪本名物浪花のながめ 半紙本五卷五冊帙入 九八 13

白縁齋陰山梅好撰 竹原春朝画

天明三年 京 吉野屋爲八求板

刊記 卷五、十五丁表に「官許安永五年<sup>丙</sup>八月」發行安永

七年<sup>戊</sup>正月」撰者陰山白縁齋「畫工竹原春朝齋」彫刻」

山本清右衛門「繪本甚兵衛」

十五丁裏に「天明三年卯五月求板」書林」京寺町五條上ル

町」吉野家爲八梓」

半紙判 麻葉地丸に菊松模様表紙 22.5×15.7cm

書題箋「名物浪花のなか免 壹(式一五)」目録題「繪本名物

浪花のなか免卷の一(一一五)」内題無し、

單辺 17.7×12.9cm 八行 十七、八字前後 平仮名交り

柱記「なか免」

卷次 一 二 三 四 五 計

丁数 一七 一五 一七 一〇 一五 七四丁

挿絵 一二 一一 一四 七 八 五二頁分

巻一首に安永七年陰山梅好序半丁あり、

梅好は大坂の名所名物を通俗に書き、之に狂哥を添る、名所  
図会の起源を爲すもの歟

注、本書原刊は、安永七年 大坂 松田弥兵衛外五店刊 中  
本五巻五冊、

淀川兩岸一覽 小本四巻四冊 二二二 14

暁晴翁撰 松川半山画

文久元年 大坂 河内屋喜兵衛外二名合板

刊記 登り下巻末及下り下巻末に夫々同文、

文久元<sup>辛</sup> 西<sup>辛</sup>年季春發行「書肆」江戸日本橋通式丁目「山城

屋佐兵衛」京都麩屋町姉小路「俵屋清兵衛」大坂心齋橋通

北久太郎町「河内屋喜兵衛」

美濃半切 単色地井桁模様表紙 18.1×12.1cm

元題箋 紅紙「淀川兩岸一覽下り船之部上(下)」上り船之

部上下二巻の題箋欠、

單辺 15.6×10.3cm 八行

上り船上下二冊は大坂八軒家より伏見經由 京 奴茶屋まで、

下り船上下二冊は京 三条橋より大坂難波橋までを描き、夫々

極彩色図 並びに案内記を敘す、

巻次 上り上 上り下 下り上 下り下 計

丁数 四二 三二 二八 二七 一二九丁

挿図 三九 三四 三三 二八 一三四頁分

上り上巻々頭に 安政三年瓢々老人漢文序二丁半あり

河内名所図會 大本六巻六冊映入 二六 15

秋里籬島撰 丹羽挑溪画

享和元年 京 大坂 六肆合板

刊記 享和元<sup>辛</sup> 西<sup>辛</sup>歲冬十一月「皇都書林」出雲寺文治郎「小

川多左衛門」殿 爲八「浪華書林」高橋平助「柳原喜兵衛」

森本太助」

大美濃判 薄纒色無地表紙 25.4×18.1cm

元題箋「河内名所図會一(二一〇)」

單辺 21.1×15.6cm 十三行 三十六乃至四十字前後 平仮

名交り 柱記無し 丁付 每葉裏のどに同「一五」の如し、

巻次 一 二 三 四 五 六 計

丁数 三一 五〇 三二 四七 四一 五一 二五三丁

挿図 一九 四六 二七 四〇 四三 四六 二二二頁分

巻一首に享和元年花山愛親漢文序二丁半、同年撰者自序二丁

半

記す所 河内地誌の内 観心寺記を主とし 南朝事蹟に多くを費す、能く自ら訪ね得たる記事誠に正確なり、本書初刷印刷精良、

(東海道)

東海道五十三次續繪 狂哥入 横大形折帖一冊 映入 二五八

16

歌川廣重(一立齋) 画 製作天保元年〜十五年

天保十五年頃 紅英堂佐野屋喜兵衛板

刊記 著彩菊花模様繪袋に、

「東海道五十三次つ、き繪」一立齋廣重筆「紅英堂寿梓」

横大折帖仕立、紺地紋編子表紙 21.2×27.5cm

書題箋 中央 金箔散し「東海道五十三次」津々き繪 狂哥

入

各画面は中判横繪、匡郭寸法 15.4×21cm

主として画面上肩に東海道五拾三次廣重画と署名

各面に狂哥一首及作者名を記す

匡郭外に「佐野喜」朱印あり 極印付

画面総数五十六枚 京都大内裏図ある爲通例より一枚多し、

外に彩色繪入袋一枚、

図中、戸塚、吉原 金谷 浜松の四図は虫損稍甚し、

本續繪は昭和三十六年神田大屋書房に袋入のま、之を購め

しが、虫損と散逸を恐れて画帖に仕立て置きたるなり

注、廣重は天保四年保永堂板東海道を刊行して以来 三十種

に及ぶ東海道続繪を作れるが 本図 狂哥入も亦優れたる作

品の一として珍重せらる

東海道名所図會 大本六卷六冊 五五 17

秋里籬島撰 竹原春泉画

寛政九年 大坂 河内屋柳原喜兵衛板の同一板元後印

刊記 卷六、八十丁裏に

寛政七歳「寛政九」<sup>丁</sup>「載十一月」書林「浪花」柳原喜兵衛

京師「田中庄兵衛」出雲寺文次郎「小川多左衛門」殿爲八

今井喜兵衛「武村甚兵衛」榑谷市兵衛「東都」須原茂兵衛

前川六左衛門「小林新兵衛」

右初版寛政九年版の刊記をそのま、残し 次丁に後摺版の

刊記を記す

發行「書肆」江戸日本橋通壱丁目須原屋茂兵衛「浅草茅町

二丁目同 伊八」芝神明前岡田屋嘉七」両国横山町三丁目

和泉屋金右衛門」下谷池之端仲町岡村庄助」日本橋通二丁

目須原屋新兵衛」芝神明通和泉屋吉兵衛」京都三条通御幸

町角吉野屋仁兵衛」尾州名古屋本町通永楽屋東四郎」同所

斐屋藤兵衛」大坂心齋橋通北久太郎町河内屋喜兵衛板」

(補) 須原屋伊八の次に、日本橋通二丁目山城屋佐兵衛を

加ふ、

美濃判 黄土色紗綾模様空押表紙 23×18.3cm

元題箋「東海道名所図会一(一一六)」

單辺 20.9×15.8cm 十三行 三十四、五字前後 平仮名交

り 柱記無し

丁付は毎丁裏のどに「番ノ四」の如し 卷一目録初丁表のどに

彫刻人樋口甚其他諸所に彫刻人名を刻す

卷次 一 二 三 四 五 六 計

丁数 七七 八一 八一 七〇 六七 八〇 四五六丁

画図 六〇 七六 六四 四八 五二 六六 三六六頁分

卷一首に寛政九年中山愛親序三丁半 熊谷箕山漢文序半丁、

卷六尾に寛政九年撰者自跋漢文一丁半

画図は諸国絵師の寄合書にて、細畫は春泉齋の一筆なり、江

戸については殆北尾蕙齋の描く所多く、日本橋、京橋、双紙

問屋泉屋市兵衛店皆然り、

注、春泉齋、竹原春朝齋の男、画名清秀とも云ふ、寛政文化

期に画き 名所図会多し、

(武藏)

江戸名所図會 大本七卷廿冊 一〇六 18

齊藤松涛軒編 同莞齋及同月岑校 長谷川雪旦画

天保五年三卷十冊、同七年四卷十冊 須原屋茂兵衛 同伊八

合板

刊記 才十冊尾に、

天保五年甲午孟春」日本橋通巷丁目」須原屋茂兵衛」浅草

茅町二丁目」須原屋伊八」三都発行書林」京都寺町通松原

下ル勝村治右衛門」大坂心齋橋筋唐物町河内屋太助」大坂

心齋橋筋安堂寺町秋田屋太右衛門」江戸両国吉川町山田佐

助」神田鍛冶町二丁目北島順四郎」浅草新寺町和泉屋庄次

郎」芝神明前岡田屋嘉七」日本橋通二丁目山城屋佐兵衛」

日本橋通二丁目小林新兵衛」日本橋通四丁目須原屋佐助」

南傳馬町巷丁目須原屋文助」神田通新石町須原屋源助」

才廿冊尾に

天保七丙申青陽」東都書舖」日本橋南一丁目」須原屋茂兵

「衛」浅草茅町二丁目」須原屋伊八」

三都發行書林」(以下十二名連記す、前記発行書林名より

須原屋文助を除き 江戸今川橋本銀町永楽屋東四郎を加ふ)

美濃判 薄鼠色小松霞模様空押表紙 26×18.2cm

元題簽「江戸名所図會」(一一廿)

單辺 21.1×15.8cm 十二行 廿八、九字前後 平仮名交り

柱記無し 丁付各葉裏のどに「ノ」の如し

冊次 一 二 三 四 五 六 七 八

丁数 六三 四六 五八 八〇 五一 六二 六〇 七六

挿図 五五 六二 六五 八一 五八 六五 七一 六八

九 一〇 一一 一二 一三 一四 一五 一六 一七

四三 五八 五六 五三 八七 五一 四六 四一 五〇

四五 五二 五八 五九 七八 六三 六七 六一 六四

一八 一九 二〇 計

八一 五一 五六 一、一六九丁

九五 五七 五〇 一、二七四頁分

「一冊見返扉に、「東都名所図會」松涛軒長秋編輯」長谷川

雪旦図畫」

巻頭に天保三年松平冠山漢文序四丁、同年亀田長粹漢文序三

丁、同年片岡寛光序五丁、文政十二年撰者自序四丁、

才廿冊卷末奥付に、

「編輯松涛軒齊藤長秋」校正男藤原縣麻呂」同県磨男同月岑

幸成」畫図長谷川法橋雪旦」劄刷東都佐脇伊三郎」朝倉伊八」

宮田六左衛門」

次に上田兼憲跋二丁半、

本書は松涛軒在世中 既に北尾重政の挿絵により全八冊とし

て寛政十年出版許可を得たりしも 故ありて刊行に至らず

幸孝、幸成の補入後四十年を経て漸く發刊せらる、一市井の

町名主三代に亘り努力を傾注したる大著なり

繪本江戸土産 小本欠八冊 一、一九七 19

架藏番号一、一—六編—一九七、七編—一九八、九編—

初代歌川廣重撰并画 初編—六編

七編より十編まで二代廣重之を画く

江戸 金幸堂 菊屋幸三郎板 嘉永—慶應年間

刊記 全冊出版及賣出書肆名のみ記して刊年を記さず

(初—六編)

美濃半切 黄土、紺、丹、緑、岱緒、薄鼠 各冊替色表紙

18.2×12.2cm 元題簽、「繪本江戸土産東」(一編—六編)」

初編見返扉に「晝本江戸土産 初篇 廣重筆 金幸堂梓」彩色絵入(ナ)とあり以下各冊見返扉何れも同趣向とす

初、二、三編に嘉永三年松亭金水序、四編に同年廣重自序、

五編金水序、六編に松園主人梅彦序を載す

編次 一 二 三 四 五 六 計

丁数 二五 二七 二六 二五 二五 二五 一五三丁

画図 四八 五二 五〇 四八 四八 四八 二九四頁分

(七編及九編)

美濃半切 濃黄及黄色表紙 寸法同前

書題簽「絵本江戸土産七編(九編)」

見返扉に「江戸みやげ七篇(九編) 廣重筆、金幸堂梓」彩色絵入、

七編は金水序、九編に元治元年柳亭春水序 各一丁

編次 七 九 計

丁数 二五 二五 五〇丁

画図 四八 四八 九六頁分

注、本書は十編十冊を以て完とす 家藏八、十編を欠く、

本書と題名を同うするもの 宝曆三年刊西村重長画 中本

三冊江戸奥村喜兵衛板、続編鈴木春信画 中本三冊明和一丁

七年刊 京 菊屋安兵衛板あり

本書の刊行手次は嘉永三年より慶應三年に及ぶ、

分間御江戸繪図 一舗 二七一 20

文政年間 江戸 吉文字屋及山田屋合板(求板)

刊記 地本問屋永寿堂西村屋與八元板「文政新鐫」日本橋通

三丁目吉文字屋治郎兵衛「芝神明前山田屋三四郎」板」

十六折 西ノ内二枚継 寸法 40.6×59.7cm

匡郭寸法 47×68.2cm

張出図 本所東部葛西村方面 10.8×20.4cm

元題簽 黄紙「分間御江戸絵図 全」

平仮名 色入 彩色 一分三十間の積り

図の左右を南北とし千代田城を中心に展開、本所深川東部を張出図を以て示す、東は行徳境、北は千住三河島 王子、西

は雑司ヶ谷、高田馬場 下目黒、南は目黒、品川、傳馬筋とす、左下隅に「江戸日本橋より諸方へ道法」として四十四ヶ

所への里程を示す、

注、割印帳を見るに、「文化十西三月廿五日割印、分間江戸

絵図 折本全一冊墨付西ノ内二枚継、文化十西三月刊、板元

西村屋与八」

「文化十四年丑春行事取調之上株式相定再改竄一尺三寸五分横一尺九寸八分平かな 色入 張出堅三寸五分横六寸五分元板山田屋三四郎 吉文字屋次郎兵衛 株を以文化新板」とあり、

以上より考ふるに、本図は文化十年の元板西村屋与八のものを 文化十四年 山田屋と吉文字屋の株を以て求板印行し更に此両名文政度に再摺したりと覚ゆ、

江戸切繪圖 近吾堂版 三舖 二二三二 21

高柴三雄撰

江戸 近吾堂近江屋五平板

浅黄色布目表紙 元題箋 彩色入

繪図寸法 44.5×64cm 匡郭内法 40.1×57.2cm

二二三二A 麻布廣尾辺繪図

元題箋「麻布廣尾辺図 全」

刊記 嘉永二酉歳改「高柴三雄訂」 麴町拾丁目「近吾堂板」

二二三二B 小日向小石川牛込北辺繪図

元題箋「小日向小石川牛込地図 全」

刊記 嘉永二酉春改「高柴三雄誌」 麴町十丁目「近吾堂藏板」

二二三二C 芝愛宕下西久保辺繪図

元題箋「芝愛宕下西久保図 全」

刊記 嘉永元改 高柴三雄訂「麴町拾丁目」 近吾堂藏板」

近吾堂版切繪図は金鱗堂版に比し、その記載精確詳密、殊に市中全域の辻番所は一目瞭然たり、俗に番太郎繪図と称せらる、全三十八舖総べて寸法同一にして彩色は稍地味なり、

注、二二三二A、此図は嘉永七年再版、別に同年紀の明治版あり、

二二三二B、此地方に就ては 安政三年「再版小石川、牛

込小日向辺図、」及「小日向牛込関口辺図」を刊行、又何

れも同年紀の明治版あり

二二三二C、此地方、嘉永二年再版、別に同年紀の明治版

あり

江戸切繪図 金鱗堂版 四舖 二二七七 22

戸松昌訓撰

江戸 金鱗堂尾張屋清七板

紺無地表紙 元題箋 極彩色

二二七七A 礪川牛込小日向繪図

元題箋「小日向繪図」

寸法 72.3×36cm 匡郭 68.7×33.1cm



刊記 戸松昌訓図著「嘉永五子秋新刻」板元「麴町六丁目」

金鱗堂「尾張屋清七」

二三七 B 東都青山絵図

元題箋「青山渋谷絵図 全」

寸法 49.5×52.8cm 匡郭 46.1×49.5cm

刊記 嘉永六年「丑夏新刻」戸松昌訓「図之」麴町六丁目

金鱗堂「尾張屋」清七板」

二三七 C 本所深川絵図

元題箋「深川絵図 全」

寸法 74.4×53.1cm 匡郭 70.4×50.6cm

刊記 戸松昌訓図之「安政二卯歳改正」板元「麴町六丁目」

尾張屋清七」

二三七 D 小石川谷中本郷絵図

元題箋「本郷陽島絵図 全」

寸法 49.5×53.3cm 匡郭 46.3×49.4cm

刊記 安政四丁巳歳改「戸松昌訓図之」板元「麴町六丁目」

尾張屋清七」

江戸切繪図 金鱗堂版三鋪 一三八 23

景山致恭撰

江戸 金鱗堂尾張屋清七板

紺無地表紙 元題箋 極彩色

二三八 A 増補 飯田町  
改正 駿河臺 小川町絵図

元題箋、「駿河台小川町絵図 全」

寸法 36.7×74cm 匡郭 34.6×68.4cm

刊記 嘉永三庚戌夏新刻「景山致恭著之」板元「麴町六丁目」

尾張屋清七」

二三八 B 増補 今井町赤坂絵図  
改正 六本木

元題箋「赤坂絵図 全」

刊記 景山致恭図之「嘉永三戊年新鑄」麴町六丁目「金鱗堂」

尾張屋清七板」

二三八 C 増補 飯田町  
改正 駿河台 小川町絵図

書題箋「小川町絵図 全」

撰者不詳

寸法 35.9×75cm 匡郭 34.5×68.6cm

金鱗堂版切絵図の特徴、図面の彩色甚しく華麗、川堀池を青、道路を黄、神社佛閣を紅、町家を単、土手 田畑原野を濃緑、五色に著彩、爲に、図見易く、町家と武家との区分一目瞭然、大名上屋敷にその定紋入とするを特色とす、尤

も図寸法は区々なり、

江戸風景 小本上下二冊共箱付 一九九 24

四代歌川廣重(菊池貴一郎)撰并画

刊記 大正四年五月二日発行「日本橋区本銀町一丁目十七番

地著作兼發行者 菊池貴一郎」日本橋区本石町二丁目一番

地」彫刻者 江川八左衛門」神田区表神保町十番地」發賣

所 誠文館」

美濃半切 渋引表紙 18.3×12.3cm

元題箋 黄紙「江戸風景上(下)」

單辺 15.1×10.5cm 七行 平仮名交り 序文のみ

上巻、表紙見返扉 絵入半丁、大正四年流觴居水巴序二丁

総廿丁、画図十九図、内御門十七図

下巻、表紙見返扉 絵入半丁 総廿丁 画図廿図 内御門十

九図、計三十六見附の全景を描く 御門各図は総て見開、な

り

共箱、表に「歌川廣重画江戸風景上下 東京東海堂梓」供揃

彩色絵入

注、撰者には別に「江戸府内絵本風俗往来」の著あり、

東京名勝畫詞 大本二巻二冊原帙入 一五九 A 25

増山守正(丹蓉)編

明治廿年 東京 集英堂刊

刊記 明治廿年九月十五日版權免許「同年十月出版」編輯人

増山守正」出版人小林八郎」發兌日本橋集英堂」

美濃判 黄紗綾形模様表紙 26.4×18cm

元題箋「増山守正編輯  
東京名勝畫詞上(下)巻」

表紙見返に扉、紅紙、「増山守正編輯、東京名勝畫詞全二冊

東京書肆 集英堂藏」

内題「東京名勝畫詞 上(下)巻」

單辺 20.6×14.6cm 内容は殆大半画図にして之に添ふる漢

詩 和歌 俳句は行数 字詰不定、

丁数 上三五 下三六丁 名家の画図 三三図

上巻首 明治廿年巖崎秋溟漢文序一丁 自叙一丁 例言一丁

下巻末 刊記に次で各府県發賣書肆一丁を附す 原帙は紙製

彩色模様入、

畫図 内容は東京府下名勝三十一景を採り 之に題詠を附し

たり

續東京名勝畫詞 大本二巻二冊 一五九 B 26

増山守正編

明治廿三年 東京 私版

刊記 明治廿三年八月十日印刷「同月十五日出版」編輯者

増山守正「発行兼印刷者 増山持正」彫刻 山口武勝

判型 表紙 寸法 匡郭 総て正篇一五九Aに同じ

元題簽「増山守正編輯  
續東京名勝畫詞 上(下) 卷」

上巻見返に扉、紅紙「増山守正編輯、續東京名勝畫詞全二冊、

東京 静香園藏」

内題「續東京名勝畫詞上(下) 卷」

丁数 上三八 下四一 計七九丁 名家の插图 三三図

上巻首に明治廿三年九鬼成海題字一丁、同年大沼沈山漢文序

二丁、同年自叙一丁、

本書は正篇に漏れたる府下の名勝三十三景を選び その画に

夫々題詠を附したるもの、

補遺東京名勝畫詞 大本二卷二冊 一五九C 27

増山守正編

明治廿四年 東京 私版

刊記 明治廿四年十二月十五日印刷「同月十九日出版」編輯

者増山守正「発行兼印刷者増山持正」彫刻山口武勝

判型 表紙 寸法 匡郭 総て正篇一五九Aに同じ

元題簽「増山守正編  
遺東京名勝畫詞 上(下) 卷」

上巻表紙見返に扉ありて文言前書に同じ、内題「遺東京名勝

畫詞上(下) 卷」丁数 上四五 下四七丁 計九二丁 名家

挿絵 三十二図

上巻首に伊藤橋庵題字一丁、明治廿四年李家隆彦漢文序一丁、

同年自叙一丁、

本書は前書以外の府下名勝三十二景を選び 画及題詠を列ね

たるもの

(木曾海道)

岐蘇路安見繪図 小形横本一冊 二五三 28

桑楊撰

宝曆六年 京 茨城多左衛門外二店板

刊記 宝曆六年十一月「京都茨城多左衛門」江戸須原屋茂

兵衛「同 萬屋清兵衛」

半紙半截横本 紺表紙 11.5×16.4cm 題簽欠

表紙見返扉題「岐蘇路安見繪図」

桑楊自序半丁、諏訪湖図半丁、

本文單辺 9×14cm 総七十三丁

江戸より京に至る上り中山道 木曾路の道中図絵、各宿毎見

開き一丁に図示し、簡單なる説明を附す、

彩色は、本書を浅草広小路浅倉屋に求めたる田中清美なる者

之を彩したりと覺しく かなり丹念なる筆なり、或は參觀途

次の實用にてもあるか書入入念に見え 或は尾藩の士ならん

歎、

## 汲古儲藏志 卷七

古物語・室町物語

辞書・書目

挿絵 各卷三丁

伊勢物語 写中本一冊 二五一 2

作者不詳 醍醐帝延喜中成立、

枳形本 寸法 16×17.2cm 綴葉装 表紙茶地梔子花文様の

緞子、見返鳥の子に金描楓葉散らし模様を置く、

題簽 中央、鳥の子赤地金泥に伊勢物語と記す、

本文料紙 鳥の子 一面十行 十六、七字前後 奥書なし

総墨付七十六丁 遊紙前後各一丁 江戸初期書写

伊勢物語塗籠御本 横本一冊桐箱入 複一一九 3

古文学祕籍刊行会 昭和九年 複製影印

大和綴 寸法 17.2×18.8cm 書題簽 総六十五葉 内墨付

六十三丁 一面十行

卷末に、此本者高二位本朱雀院のぬりこめにをさまれりとな

りとあり、(本文同筆)次に在原業平事蹟一丁 次に奥書、

這伊勢物語者京極黄門定家卿息女民部卿寫之真翰無疑者也」

寛文四<sup>甲</sup> 辰初冬」冷泉左中将爲清」

注、原本を影写したと目さる、不忍文庫藏本の影印なり、原

本は假綴、料紙薄葉、

往生要集 大本三卷六冊 二六六 4

竹とり物語 大本二卷二冊 二七四 1

作者、成立年代不詳、一説嵯峨天皇弘仁中成るといふ

原刊 京 茨城板(正保歿)の大坂 河内屋求板なり、

刊記 下卷末十九丁ウに 茨城多左衛門板

下巻奥付に「浪華書林」北久太郎町心齋橋通北エ入」河内屋

喜兵衛梓」

大美濃判 單辺 十一行 絵入 丁数 上廿五 下廿二丁

僧源信（恵心僧都）著 永観二年成る

寛永十七年京版 刊記 下之末四十六丁（卷末）に 世間流

布之本依繁落字謬點令尋求往古楞嚴院點求開板之信師言置之

座右備於廢忘司爲證明本而已」 旨寛永十七年庚辰正月吉日」 洛

陽二條寺町誓願寺前」 安田十兵衛開板之一大美濃判 雙辺

無界 九行 十九字 版心 花魚尾 往生要求（卷数）（丁

数）

丁数 五八、四四、四二、三四、三一、四六 総式百五十五

丁 念佛行者の爲 經論より往生の要文を集め 十章に分ちて説

く、

狭衣 半紙本四卷十二冊 一九六 5

六條齋院祿子内親王宣旨作 永正天喜頃成る

承應三年江戸黄墓山釋切臨傍注 承應三年刊

刊記 才四卷之下末に、斯さころもの系譜は西三條逍遙院入

道堯空尊者の御作云々尤精撰なるへし このころ他本をあつ

め校合するに展轉書写のあやまりに損落の文字又前後の錯乱

ありて是非をわきまへかたきところ／＼ 本書に考合て清書

せしめ早に時承應甲午歲仲夏日東京黄墓山釈野切臨叟誌之」

書林の刊記なし、

半紙判 單辺 十一行 絵入 本文四卷十冊 目録、系図各

一冊、丁数 本文 五百二丁 目録系図廿九丁 挿図 四十

六 傍注付

注、作者は源頼国の女、本書は平安後期源氏に並ぶ雄篇なれ

ども 住吉物語と共に傳本上最も異本多きもの、校合容易な

らず、刊本は流布本として諸本の混合したる態を呈す、

撰集抄 大本九卷九冊 一七一 6

傳西行作 後人の補筆多し、成立年時不詳、鎌倉時代

百三話、殆佛敎説話集也、

慶安四年京版 刊記 此書有廣略二本、共行于世矣、然而升

謬甚多、今依廣本聚数本加校讎以録諸梓、間有風葉之可拾、

猶是足爲正矣。

慶安四年重陽吉  
村上平楽寺刊行  
(蓮華杵)

大美濃判 單辺 十一行 絵無し、振仮名付

丁数、二七、二五、二〇、二五、二九、四二、三一、三八、

三六 総二百七十四丁

注、本版以前に元和 寛永中 古活字数版、あり 皆三冊  
略本なり

慶安三年整版 沢田庄左衛門板は廣本九冊、

西行物語 大本三卷二冊 帙 六一 7

作者不詳 西行自著の体裁を取り 發心の上 和歌修行に志すに至る経緯を敘す、正保三年京版

刊記 正保第三<sup>丙</sup>朱明日<sup>戊</sup> 木村次郎兵衛刊行

大美濃判 寸法 27.7×17.7cm 丹表紙 題簽 西行物語上

(下)

内題尾題共に無し 匡郭無し 每半葉十一行

丁数 上冊十九 下冊中卷十三 下卷十九丁

注、本版は川瀬一馬博士の所謂第一類本にして 当初上中下

三冊なり、本版の後印に「元禄五<sup>壬</sup> 申年正月吉日 洛陽書林

淺見吉兵衛板」あり、

西行物語繪卷 一卷卷子一軸 桐箱入 複一二〇 8

大和絵同好會 昭和三年複製影印

傳土佐經隆画 鎌倉時代十三世紀作

紙本 墨彩 縦一尺五分、原寸影印

原本 徳川黎明會藏 重文、もと四卷と推定さる、も 他に

大原総一郎藏の一卷のみ現存、本巻は出家決意してより 嵯

峨にて剃髮する迹を描く、原本淡泊なる著彩あり、描線細密、

山水殊にめでたし、川瀬博士才三類本(繪卷四卷本)

つれづれ草 大本二冊 帙 一〇九 9

吉田兼好著 寛文十年京版

刊記 従古雖有徒然之重板多世間、假名遣誤依有之今又以奥徳之写本令開板者也」山本九左衛門「寛文拾<sup>庚</sup> 歲三月吉祥日」

大美濃判 單辺 十四行(一部十三行) 絵入 丁数 上五十、

下四十丁 十三行は上冊才二、三、五十丁 下冊才一、二、

三十九丁

插图 上一五 下一〇 内容 上冊一三六 下冊一一五段

総二五一段

注、本書は江戸期最も士人の好尚に投じたりと覺しく 慶長

寛永間の古活字印本十数版、正保以後の整版 刊年の明かな

るもの廿七版に上る、

宇治拾遺物語 半紙本十五卷十五冊 一七八 10

撰者不詳(傳源隆國) 鎌倉初期建保年間成る

萬治二年京版 刊記 才十五卷裏見返に 萬治二<sup>己</sup> 年初冬

日」洛陽今出川書堂」林和泉掾板行」

半紙判 紺表紙 題簽中央 單辺 十一行 絵入

丁数 五〇、三五、三六、二一、二二、二四、二三、二一、二六、二五、二五、二九、二七、二六、二五、総四百十四丁  
插图 三十三図

注、鎌倉時代説話文学中 最も秀れたる集也 百九十七話

住吉物語 大本二卷合一冊 六四 11

作者、成立不詳、黒川春村に依れば 現存本の文体歌柄より承久年中ならんと。異本甚多し、

寛永九年 京版

刊記終丁ウ重郭付寛永九年壬申十二月「吉日中野氏道也梓」

大美濃判 濃紺表紙 書題簽 無巨郭 每葉十三行 廿乃至

廿二字詰 絵無し 柱記「住吉」(丁数)

丁数 総五十七丁 丁付 上下通しなり

本書巻別稍明かならず 内題オ一丁に「すみよし物語上」下巻

内題無く 尾題「住吉物語終」、

(貼紙) (ボールペン書)

住吉物語】No.64

本書巻別稍明瞭ならず、されど三十四丁ウは二行にて終り

十一行空白なり、且つ文意亦終る、即ち本丁にて上巻末、なるべし、

前架藏者 他書と校合したりと覺しく 朱筆加注多し、

本物語は慶長寛永古活数版、整版寛永九年、万治二年、寛永元年 宝曆九年、及無刊記の諸版あり、

又写本異本甚しきこと古来名あり

平家 零本大本四卷四冊 帙 一〇四 12

傳信濃前司行長作 古活字本

第六、九、十、十一卷 四冊を存す 刊年慶長中欵

大美濃判 薄茶表紙 寸法 28×20.8cm 更にその上に丹表

紙を補綴す、四周雙辺 22.7×17.7cm 每丁十二行 每行廿

乃至廿三字詰 片假名交り 句読訓貞なし、版心 黒口花魚

尾「平家」(巻数) (丁数)、

書題簽「平家」、内題「平家卷才六(十、…)」

丁数 卷六、三四 卷九、五三 卷十、四四 卷十一、五五

但卷十一ノオ九丁  
番丁ナリ

斑山文庫印あり 高野辰之博士旧藏なり、博士は新に丹表紙

を補ひ、表紙に「共四、古活字本、平家零本、卷六(九、十、

十一)」と自ら識されたり、按ずるに本書古活字印面精整ト

ハ云ヒ難シ、而モ博士其古刊の故を以て格別丁重に取扱はる、古書愛惜の情思ふ可し、予心より之を欣ぶ。

保元平治物語 大本六卷六冊 帙 一一四 13

作者未詳、保元三卷、平治三卷なれども両物語作者は同一也

成立は治承以後鎌倉將軍時代なり、

明暦三年 京版 刊記 明暦三丁酉年重陽吉辰「洛陽寺町誓

願寺前」安田十兵衛板行」

大美濃判 單辺 十三行 柱記「保元」又「平治」絵入

丁数(函数)二五(一〇)四九(一一)四〇(一一)四四

(一四)四三(一〇)四六(一一)

内題 保元卷一「保元合戦記上」其他「保元物語卷才一(二、

三)」「平治物語卷才一(二、三)」印面精良 毎行廿二乃至

廿六字詰 鳥越池田侯旧藏印記

注、本物語整版は寛永元年(十一行)同三年(十二行)無刊

丹緑、明暦三、貞享二等。本文内容(本書)は古活字才一種

本の系統に属す、

いさよいの日記 半紙本一卷二冊 帙 二五〇 14

阿佛尼(安嘉門院四條)作 永仁六年成立

萬治二年京版 刊記 萬治二亥歳季夏中旬「洛陽今出川」林

和泉板行」

半紙判 單辺 十行 十三乃至十五字詰 丁数 総四十九

丁付上下冊通し、插图 上冊無し 下冊三、

注 本書は元和寛永中の古活字版一種のみ、大美濃判 十一

行、廿字詰 総三十四丁、整版亦万治版及無刊記のみ

車僧草子 写大本一卷一冊 桐箱入 複一一六 15

作者不詳、近世初期写 お伽草子

京都帝国大学 昭和十六年影印(縮寸)

美濃判 綴葉装 寸法 23.5×16.7cm 濃紺地に金雲散し表

紙、見返し銀紙貼合せ、題簽 中央 紅色地に金雲「車僧草

子」遊紙前後各一葉 墨付十八葉 挿絵 片面五頁 見開二

図、

原本は「車僧の巻物」と称する繪卷一卷、八、八五 本文全

長 二〇、〇七 京大藏 天下一本といふ、

附、車僧草子解説 大和綴一冊 藤井乙男博士解説

信貴山縁起繪卷 卷子三卷三軸 桐箱入 複一一七 16

大塚巧藝社 昭和廿九年複製、

傳鳥羽僧正覺猷華 平安後期十二世紀作 紙本 水墨 縮寸

影印 各卷 縦一四、八cm 飛倉の巻 延喜加持の巻 尼公

の巻の三卷

原本、国宝 朝護孫子寺藏 傳存繪卷中の圧巻、原本は紙本



着色 縦一〇五

曾我物語 大本十二卷十二冊 二二〇 17

作者明かならざれども箱根唱道僧と推定、室町初期に成立せる真名本十卷なりしが、数十年後念佛僧之に増益を加へ十卷とす、

寛永四年京版 刊記 于時寛永四丁卯年「六月中旬」洛陽三

條寺町誓願寺前「安田十兵衛尉開板」

大美濃判 丹表紙 無匡郭 十二行 廿二乃至廿四字詰 絵

無し 寸法 28×18.4cm 柱記「曾我（巻数）（丁数）」

丁数 五四、三四、三〇、三七、四八、三四、三七、三七、

三四、二四、一一、一一 総四百十二丁 書題簽

注、本版は整版の内 最初の版本也

曾我物語 大本十二卷十二冊 五六 18

寛文三年京版

刊記 寛文癸卯仲夏吉辰「井上権之丞」山本長兵衛(3,4)

大美濃判 紺表紙 寸法 26.7×19.1cm 題簽 中央「曾我

物語」二元題簽卷三〜九、十一に存す、單辺 十三行 廿五

乃至廿七字詰 絵入、柱記「曾我物語（巻数）（丁数）」(3,4)

内題 曾我物語卷才一（二…十二）

丁数 五五、三六、三〇、三六、四七、三二、三六、

挿図 片面 四 一二 八 八一 二 四 一三

見開 九 三 一 二 二 二 〇

三六、三五、二四、二〇、一九 三六七

六一〇 一〇 四 六 八七（計算合わず）

三 二 一 〇 〇 二五（罫省略）

戸川残花旧藏

義経記 大本八卷八冊 二二四 19

別名 判官物語 作者不詳 室町初期成立

寛永十二年京版 繪無し、

刊記 寛永十二年乙亥「正月吉辰」

大美濃判 縹色表紙 寸法 27.5×18cm 元題簽「義経記卷

才一（二…八）」角書新板、内題 義経記卷才一（二…八）

無匡郭 十二行 廿三乃至廿六字前後 柱記「義経一（二…

八）（丁数）」

印面良、丁数 十八、廿六、廿二、四十三、四十六、五十二、

五十六、廿四 総三百七丁

注、義経記整版としては「寛永十癸酉五月吉日西村又左衛門

梓行」の刊記ある大著の三冊本を最初の版刻とす

又本書同年版には 丹緑本等異種<sup>二</sup>、三あれども 家藏本を  
同年初版なりと推定す、別考に詳記せり、

義経記 大本八巻八冊 一三二 20

寛文十三年京版 繪入

刊記 寛文拾<sup>三</sup>癸<sup>丑</sup> 仲春吉日<sup>一</sup>

大美濃判 青表紙 寸法 26.7×19.4cm 元題簽「義経記<sup>一</sup>

（二一八）」内題 義経記卷才一（二一八）單辺 十四行 廿三

乃至廿七字前後 柱記「義経一（二一八）〔丁数〕」印面良

丁数 一八、三三、四四、四二、四二、四九、五一、廿三

総三百二丁 挿図 片面四二面

注 卷七虫損あり、

義経記 大本八巻八冊 帙 一一三 21

元禄十年 京版 絵入

刊記 元禄十年<sup>丁丑</sup> 孟春穀旦「京姉小路堀川東江入町」中川

茂兵衛<sup>一</sup>同 弥兵衛<sup>一</sup>

大美濃判 薄青表紙 寸法 25.6×18.4cm

題簽「義経記<sup>一</sup>（二一八）」角書 新板絵入 内題「義経記

卷才一（二一八）<sup>マ</sup>單辺 十三行 廿七、八字前後 本文文

字稍、院本風なり、印面良、

丁数 一八 三〇 二七 三八 三九 四一 五一 二五  
挿図 六 四 六 六 六 六 八 六  
計二六九丁

四八面

注、古義経記三本何れも京版なれども 全く板刻を異にす、

善光寺本地 大本三巻三冊 帙 一一三 22

撰者不詳 緑起本地物の一 享保三年京版 絵入

刊記 享保三戊戌年「十月吉日」二条通「丸屋市兵衛<sup>新</sup>板

大美濃判 薄纒色表紙 寸法 25.6×18.1cm 題簽欠

内題 ぜんくはうじほんぢちくはん（中、下）單辺 十一行

廿二乃至廿六字詰 柱記、善光寺本地上（中、下）

丁数 十九、十五、十五 総四十九丁 挿絵 五、四、五、

計十四面

中巻一部本文を欠損す 十二丁ウ及十三丁オ、ウ、同巻挿図

一面欠 十五丁ウ、一部補写 十二丁オ、

注、本版は、萬治二年佐野七左衛門板を祖本とし、後 野田

庄右衛門求板後刷、更に右丸屋求板後摺したるものなり、

（横山重氏）

釋迦の本地 大本三巻合一冊 帙 二二六 23

作者不詳 縁起本地物の一

慶安元年京版 絵無し

刊記、慶安元<sup>戊午</sup>年「霜月吉日令開板者也」

大美濃判 藍色無地表紙 寸法 27.2×18.3cm 題簽欠

内題、釈迦の本地上(中、下) 單辺 十一行 十八—廿二字

版心、上下共花魚尾「釈迦本地上(中、下)〔丁数〕」

丁数 廿二、十九、廿三、総六十四丁

注、本書は寛永廿年橋屋源兵衛板と同板、其の求板後摺なり

(横山重氏)

十二たんさうし 大本三卷三冊 複一二二 24

作者不詳 室町中期成立 古淨瑠璃

稀書複製会複製 昭和七及八年

慶長古活字版(嵯峨本) 絵入

大美濃判 黒色表紙(表紙は嵯峨本を摸せず) 無刊記

題簽 十二たんさうし上(中、下) 内題無し 寸法 28.5cm×

20cm 無匡郭 印面寸法 21.5×15cm 十行 十九字 柱

記、丁付なし、丁数 二八、二六、二一 計七五丁

挿絵 六 三、五 一四面

上卷 一—六段目 中卷 七—十段目 下卷 十一—十二段

目

注、本書には目録なし、他版本により之を補ふ

一、じやうるり 二、花ぞろへ 三、びじんぞろへ 四

花のくわげん 五 ふえのだん 六 つかひのだん 七

しのびのだん 八 じやうるり枕もんだう 九 やまとこ

とは 十 ごごうつり 十一 ふきあげ 十二 御ごうし

東くだり

たかたち 中横本一冊 複六八 25

稀書複製会複製才一期 大正七年 古淨瑠璃五段物

作者不詳 寛永二年京版 丹緑絵入

刊記 たかたち五段にておはる「寛永二年」正月吉日「寺町

妙満寺之前勝兵衛開板」

半紙横判 寸法 15×21.2cm 題簽「たかたち五段 全」

内題「たかたち 一たんめ」各丁行数不定 十九乃至廿九行

每葉本文の間に絵を挿入す、筆彩丹緑絵入 柱記「(段数)

(丁数)」

注、本書を以て現存江戸淨瑠璃本の先駆となす、且つ、本文

は 舞の本たかたち 其の仮なり、四段目に二葉の落丁ある

もそのま、複製す、落丁本文を解説(別冊)に載せたり、

はらだ 中本一冊 複五三 26

稀書複製会才八期複製 昭和八年

古淨瑠璃 六段本 若狹守吉次正本 丹緑絵入

刊記 二條通草紙屋喜右衛門板

刊年未詳なるも 若狹守は寛永慶安の間に栄えたる者なれば

慶安頃刊なるべし 内題、天下一若狹守藤原吉次正本」はら

た 一たんめ」

美濃半切 寸法 19.7×13.6cm 單辺 十四行 総十六丁

挿絵 六頁 筆彩丹緑 柱記「はらた上(下)(丁数)」

こあつもり 中本一冊 複五二 27

稀書複製会才八期複製 昭和八年

古淨瑠璃 六段本 丹緑絵入

刊記 正保二年八月草紙屋喜右衛門」

内題「こあつもり一段目」美濃半切 十四行 総十四丁 挿

絵 六頁 筆彩丹緑 柱記、魚尾「あつもり上(下)(丁数)」

注、本書は水谷不倒、絵入淨瑠璃史に依れば 若狹守吉次正

一本なり、

清水の御本地 中本一冊 複七一 28

稀書複製会才七期複製 昭和七年

古淨瑠璃 六段本 丹緑絵入

刊記 慶安四 五月吉日西洞院通長者町「さうしや」九兵衛

板」

内題「江戸七郎左衛門正本」清水の御本地 初段」

美濃半切 十四行 十四丁 挿絵 見開四面 筆彩丹緑

柱記 魚尾「きよ水上(下)(丁数)」

こをとこのさうし 半紙横本一冊 複一〇五 29

稀書複製会才六期複製 昭和五年刊 木版

作者不詳 五條天神本地物、慶長以前書写奈良絵本

半紙判横本 寸法 17.4×23.5cm 表紙は料紙と共紙、

書題簽、本文と同筆、表紙にこをとこのさうしと墨書

内題なし、墨付十丁半 表紙共十二丁、每半葉行数不定なる

も 十二行乃至十五行、約十四―十九字、本文は絵の間に交

はり 或は散し書す、挿絵 十四頁分

注、原本高安六郎博士藏 字体絵柄彩色何れよりするも 最

も古風雅致を具ふる奈良絵本と称せらる

はちかづき 大本二卷二冊 帙 一三九 30

作者不詳 お伽草子継子物の一 成立室町期

延宝四年京版 刊記 延宝四丙辰年霜月吉日」

大美濃判 濃藍色花模様表紙 寸法 26×19cm

元題簽、中央「糸はちかつき上(下)」内題、「はちかつき上(下)」單辺 21.8×16.1cm 十四行 廿九乃至三十四字

丁数 上、十丁半 下、十丁 挿絵 七頁分 見開二面 片面三、版心「はちかつき上(下)(丁数)」印面稍良、

注、横山氏室町時代物語集才三によれば 本書は本文全く萬治二年松会板に異ならず、従て江戸板を上方にて求板後摺したるもの也、

辨慶物語 大本一冊上卷欠 二四四 31

作者不詳 室町初期成立 本頭か 英雄物語の一

無刊記 慶安頃刊狀 絵入

美濃判 濃緑無地表紙 寸法 25×17.5cm 題簽欠

内題「辨慶物語下」無匡郭 十二行 廿乃至廿二字位

丁数 三十八丁 挿絵、片面十図 画風古雅なり 版心、柱記又丁付共に無し、印面良

備考、横山氏室町時代小説集により 本書と慶安四年板とを對比するに、行数のみ合致し、丁数、版心全く異なる、但し本文は所々仮名を漢字に改めたる他殆差違なし、印面は慶安板と同様 古活字板の覆刻風なれども 同版とは別板か。

御曾子しま渡 中横本一冊 帙 一四三 32

作者不詳 室町中期成立 お伽草子四 異境遍歴譚 無刊記 廿三番しゆてん童子の巻末に 書林「大坂心齋橋順慶町」洪川清右衛門」とあり 享保頃刊行といはる、廿三番

廿三冊、(柏原屋、)

藍色宝玉石花模様表紙、寸法 15.9×23cm

元題簽 中央 薄紅紙に「御曾子しま渡 四」、内題なし

無匡郭 十三行 十乃至十三字 総三十七丁 丁付なし 挿

絵 十五頁分 印面良 印記 汲古堂

注、題名、「御曾子島渡」横山氏に依れば 寛永頃刊の丹緑横本ありて、之を洪川覆刻す、従て本文の筋甚良しと云ふ、

こわたきつね 中横本一冊 帙 二五九 33

作者不詳、室町中期成立 お伽草子六 異類物語

無刊記 享保頃 洪川清右衛門板 元題簽 薄紅紙に「こわたきつね 六」

表紙、寸法、行数 総て二四三、御曾子しま渡に同じ

丁数 廿五丁半 挿絵 十頁分 印面良 印記 汲古堂 注、題名、「木幡狐」

な、くさ草紙 中横本一冊 一六五 34

作者不詳 室町中期成立 お伽草子七 孝行物語

無刊記 享保頃 洪川清右衛門板

元題簽 薄紅紙に「な、くさ草紙 七」

表紙、寸法、行数 何れも二四三 御曾子しま渡に同じ 丁

数 九丁 挿絵 四頁分 印面良 印記 汲古堂

注、題名、「七草草紙」

さる源氏艸紙 中横本一冊 一八四 35

作者不詳 室町中期文明初年成立 お伽草子八 卑賤者出世

譚

無刊記 享保頃 洪川板

元題簽 薄紅紙に「さる源氏艸紙 八」

表紙、寸法、行数 総て二四三 御曾子しま渡に同じ 丁数

四十八丁 挿絵 八頁分 印面精 印記 汲古堂

注、題名「猿源氏草紙」

ほんてん國 中横本一冊 帙 二六七 36

作者不詳 室町中期成立 お伽草子十四 天上界遍歴譚

無刊記 享保中 洪川板

元題簽 薄紅紙「ほんてん國 十四」

表紙、寸法、行数は二四三 御曾子しま渡に同じ 丁数 四

十二丁半 挿図 十三頁分 印記 汲古堂

注、題名、「梵天国」、近世淨瑠璃にも終りに之を演ずること

多く、もの、終りを梵天国と云ふに至れり、

浜出草紙 中横本一冊 帙 二〇六 37

作者不詳 室町中期成立 お伽草子十七 祝儀物

無刊記 洪川板、元題簽「浜出草紙 十七」

表紙、寸法、行数、印面 総て御曾子しま渡 二四三に同じ

丁数 九丁 挿絵 五頁分 印記 汲古堂

注、本物語は幸若舞曲「浜出」を草子にしたるもの、

よこ笛草紙 中横本一冊 一六六 38

作者不詳 室町中期成立 お伽草子廿二 悲恋物語

無刊記 洪川板 元題簽「よこ笛艸紙 廿二」

表紙、寸法、行数 印面、総て二四三 御曾子しま渡に同じ

丁数 廿四丁半 挿絵 六頁分 印記 汲古堂

しゆてん童子 中横本一冊 帙 二二五 39

作者不詳 室町中期成立 お伽草子廿三 勇者譚

無刊記 一般に洪川板は此の「しゆてん童子」巻末に 洪川

の刊記ありと云ふも 本書は之を欠く、但し洪川板なること

誤なし、

表紙、装幀 行数、印面 二四三 御曾子しま渡に同じ

丁数 四十七丁 挿絵 十頁分 印記 汲古堂

注、題名、酒顛童子（大江山系）、本版は寛永刊 絵入横本の覆刻也、

右お伽草子本八冊は 昭和三十一年より三十七年に至り 本郷浅倉屋にて購む、総て汲古堂印記あり、未だ其の人を知らざれとも予と同雅号なるは一音、八冊何れも全く同一種の版本なり、

小まち物語 中横本一冊下欠 二二六 40

作者不詳 室町中成立

無刊記 藍色無地表紙、見返 銀紙貼合

寸法 15×23cm 書題簽、中央 銀紙に「小まち物語 全」

每半葉 十三行 毎行十乃至十二字位 丁数 十七丁 挿図

三頁分 印記、紅梅文庫

按ずるに、料紙甚しく煉けたるも 印面良し、本文、題簽全とあるに係らず、巻初より：伊勢物語に書きつけし筆の跡に見えぬべし」述、記し、二冊本の前半なるが如し、但し内容文言は洪川本「小町草紙」に全く同じ、

狂言記巻第一 大本一冊 八五 41

編者不詳 寛文二年安田十兵衛板（推定）

大美濃判 縹色無地表紙 寸法 27.3×19.5cm

元題簽左肩「狂言記二」内題なし、

目録題「狂言記巻才一 目録」

柱記「狂言記一（丁数）」印面精良

本文 單辺 十三行 廿二乃至廿五字位 丁数 墨付四十二丁

卷頭目録一丁に狂言十外題を記し 本文亦その全部を収載す、

挿絵 九頁分、狂言毎に一頁挿絵あるに付 十頁分なる処

才三十丁一葉落丁の爲か 絵一頁不足す、

注、刊年推定は、小汀文庫賣立目録（昭和四七、五）五四一

番 狂言記五冊（写真）と比するに 右版全く異なることなし、

依てその記載に従ふ、

因に本寛文二年版は、萬治三年畑清右衛門板五冊の再摺なり、

右書は稍々稀覯に属す、零本と雖も愛藏尊重する所以なり

（貼紙）

弘文莊書目世二号所載

七三号 狂言記 寛文五年刊 絵入 五冊

半紙判 十行二十字前後詰、

半紙判 十行二十字前後詰、

外題「狂言記」(一、二、三、四、五)】

目次は才一冊と才三冊の首にあり、ゑほしをり より太刀

はいまで六番と、はな子以下ふじまつまで五番の曲名を記

し、下に登場人物の数、名及び扮装、持物等を註す、

目録の題は「狂言記目録上(下)」、本文巻頭の内題も右の

二冊にのみあつて「狂言盡上(下)」よつて思ふに上下二

巻を五冊に分冊したものであらう。才五冊末に、

寛文五<sub>乙</sub>年三月日 板木源左衛門開板

の刊記、紙数すべて六十一枚、挿絵古風にて見るべし、

紺表紙 原装、原題箋、美本。

たまかつら 大本一冊 二四六 42

観世流一番綴本複製

元和卯月本 奥付、右百番之本者我等直傳石田少左衛門章句

付依望板起猶以令清書加奥書畢」元和六年卯月日」観世左近

大夫」暮閑(華押)】

美濃判 綴葉装 紺地金泥山水画表紙

見返、金雲散し 寸法 24×17.6cm 題箋「たまかつら」

料紙 鳥の子 整版 両面刷 無匡郭 七行 墨付九丁 卷

尾遊紙一丁、

本文版下は石田少左筆、奥書は観世黒雪自筆といふ、(高安六郎博士)

注、本複製について百方調査するも 明治以降卯月本の複製

なし、僅に昭和四十九年国書刊行会より 元和百番刊行せる

のみ、しかも之は装幀糊付といふ、本書は昭和三十五年一誠

堂にて購めたるもの、従て今猶刊年及出版者不詳なり、(法

政大学能楽研究室調)

續狂言記 小横本五卷五冊 一二五 A 43

卷一及二、卷三、卷四及五の三種取合せ本、

卷一、二、三は刊年不詳、卷四、五は天保二年大坂版、

半紙半切、表紙三様、貼外題あり、

寸法 11×16.5cm 各卷狂言十番を収む

單辺 十八行 廿字前後 丁数、廿七、三十六、三十六、三

十四、四十三、挿絵、各番末に半丁。

(卷五奥付一丁に左の奥書及刊記あり)

「右狂言記拙者家之□爲秘密任御所望写之令板行者也詞遣或

者假名遣悪敷事有之併狂言綺語也」元禄十二歳<sub>己</sub>霜月吉日」

「天保二年補刻」江戸堀北二丁目 鷲頭辰三郎 心齋橋北久

太良町」柳原喜兵衛」同 安土町」川口宗兵衛」同 本町」



笹谷爲七郎

狂言記拾遺 零本小横本二冊 一一五B 44

刊年不詳 卷一及二のみ存す

半紙半切 紺表紙 10.5×16cm 題箋「繪狂言記拾遺一」各

巻狂言十番、單辺 十八行、丁数 卷一、四十一 卷一三

十四丁 挿繪 各番末に半丁分、

注、表紙痛み甚しけれども 印面正整、

室町殿物語 半紙本十二巻十二冊 一一七 45

植村長教撰

宝永三年 大坂版 繪入

刊記「干時宝永三年正月吉日」撰陽住内本町橋詰丁」平野清

三郎開板」右は才一卷々首自序の末にあり 別に才十二巻末

に「撰陽住 貫器堂開板」

半紙判 青色表紙 22×15.8cm 元題箋、「新板室町殿物語一

（二一十一）」巻一のみ書題箋、内題、「室町殿物語卷一（二一

十一）」

單辺 17.3×11.1cm 九行 廿三乃至廿六字位 柱記「室町

殿物語」巻首 自序二丁、惣目錄四丁、

丁数 三十六、廿四、廿一、廿三、廿二、廿七、廿五、十九、

廿二、廿一、十九、廿八、総二百八十八丁 挿繪、八、六、

八、七、六、六、四、七、六、六、五、十、計七十九頁分、

注、巻四及巻十二目錄は 夫々巻三及巻十一裏表紙見返に貼

付られたり、本書内容は室町殿日記二百四十余章より抜萃

編纂せるものといふ、右日記は慶長初年成立、

源氏小鏡 大本三巻三冊 映入 一三〇 46

花山院長親撰 一説心敬撰

明暦三年 安田十兵衛板 繪入

刊記 下巻尾に「明暦三年丁酉仲秋吉辰」洛陽三條寺町誓願

寺前」安田十兵衛開板」

大美濃判 改装茶色網代模様替表紙 26.8×19.7

書題箋 紺紙「源氏小か、み中」下巻白紙「源氏小か、み下」

上巻題箋欠

目錄題 上「源氏目錄」中「源氏目錄卷中」下「源氏目錄卷

下字治十帖」内題なし

本文 無匡郭 字面高 上巻初行21.3 半葉十三行 毎行廿

（廿三字前後 平仮名交り 繪入 柱刻なし

巻次 上 中 下 計

丁数・五七 五五 二八 一四〇丁

插图 二〇 二四 一〇 五四图(片面)

別に各卷 前後に遊紙二丁あり、插图は稍縦長図にて匡郭付

約29×12.9 図の左又は右に(匡郭外の)余白を残し 本文

一〜三行を収む、又時に図の天を狭め 多少の本文を容る、

等 頗る特異なる構成なり、絵は誠に古雅にして見るに足る、

丁付は各葉裏綴目にありて田ノ四の如し、但し殆綴目に隠

れて免角明かならず

上卷 一、桐壺より 十五 權(あさかほ) まで

中卷 十、乙女より 廿七 匂ふ宮まで

下卷 宇治十帖

下巻末に長文の跋一丁半あり「夫生死無常の雲あつく本覚真

如の月出かたし……されはそれにひかれて成佛うたかひなし

といふ也、」

印面正整、初刷

本書は連歌の爲に著はされたる源氏物語の梗概書にして 又

源語中重要な語句の注釈をも加へたり 清少納言の加筆

山路の露の成立に言及せるは注目すべきなり

注、諸本(刊本)

古活字版 一、慶長古活字本 奥書「慶長十五年十二月日書

之

二、嵯峨本 大本三冊 九行

三、慶長元和古活字本 大本三冊 十一行(文庫四九一四

一三)

四、元和寛永古活字本 大本三冊 十二行(弘文四二一一

一四)

五、寛永古活字本 大本三冊 十二行

イ種 弘文四二一一二九九

ロ種 弘文四二一一三〇〇

ハ種 弘文四二一一三〇一

六 寛永古活字本 大本三冊 十三行(源氏物語事典)

整版 一、慶安四年秋田屋板 大本三冊 十一行

刊記「慶安四年卯曆仲秋吉辰」寺町通圓福寺前秋田屋平左

衛門刊行(源氏事典)

二、明曆三年安田板(家藏前出)

三、寛文六年版

刊記「寛文六<sup>丙</sup>年林鐘吉日」(源氏事典)

四 延宝三年鶴屋板(家藏後出)

五、寛延四年版 三冊(国書総目録)

六、明和三年版(同)

七、文政六年加賀屋版 三冊絵入

刊記、「心齋橋通安土町北へ入浪華書林加賀屋善藏梓」(源

氏事典)

八、刊年不詳、(宝永正徳頃)

刊記「江府文林堂 日本橋南一丁目」須原屋茂兵衛改正」

(弘文三六一一九一)

源氏小鏡 大本三卷三冊 二〇八 47

花山院長親撰

延宝三年 江戸 鶴屋喜右衛門板

刊記 下巻尾に「延宝三年<sup>己卯</sup>弥生吉辰」江戸大傳馬町三丁

目「鶴屋喜右衛門開板」

大美濃判 薄縹色無地元表紙 27.4×18.9

題簽欠、目錄題「源氏目錄卷上」(中下) 内題なし

本文 匡郭なし 字面高 上巻初行 223 半葉十五行 每

行廿五乃至卅字位 平仮名交り 絵入 柱刻なし、丁付は各

葉裏綴目にありて「源上五」の如し

巻次 上 中 下 計

丁数 四一 三八 二一 一〇〇丁

挿図 一八 一七 一〇 四五図(片面)

本文料紙は間似合紙、挿図のみ匡郭を附す 21.8×16.8

巻別章段の区分は前出明暦版に同じ、

印刻鮮明、初摺、

源氏小鏡 中本五冊写 帙入 二〇〇 48

花山院長親撰

寛文頃書写(推定) 筆者不詳

美濃判より稍小形 23.5×17.7 綴葉装

表紙 厚手鳥の子、裏表紙共に黄色地に金泥にて池水蓮花の

絵模様を全面に描きたり

見返、裏見返共全面金箔砂子散らしとし 之を表紙に貼合す、

元題簽 中央 料紙に金砂子散らし「源氏小鏡二」(一五)

目錄題「源氏目錄」(一五)

本文料紙 淡褐色鳥の子 各葉金描にて草花池水風景等を画

く 匡郭なし 半葉十行 毎行廿一乃至廿四字位

所々に挿絵を入れるべく 半葉宛空白を残し番字を附せり、一一

二〇 一一二四 一一一〇 合計五四図

各冊目錄一丁

冊次 一 二 三 四 五 計

墨付丁数 三九 二五 三〇 三四 三三 一六一丁

外に白紙 一 一 〇 〇 一 三丁

書甚流麗、丸味を帯ひたる能筆美し 恐らく大名家の賞玩本ならんか

印記「斑山文庫」陽刻 高野辰之博士旧藏

右本文を明暦版と校合するに 殆異同を見ず 唯所々同版の

仮名遣等の誤を正したるものあるのみ、殊に挿図の位置及数に就て全く符合す、一方延宝版とは全然合致せず 依て明暦

版を以て底本としたること明かなり

本書書写年代は江戸初期なること論なしと雖も 右卓よりして寛文頃と推定す、

## 七、辞書、書目

下學集 大本二卷合一冊 帙 一〇二 1

著者不詳 東麓破納序 文安元年成立

元和三年刊、刊記 元和三年丁巳孟夏吉旦梓焉

大美濃判 四周單辺 半葉七行又八十四行 毎行十八字 総

八十丁、版心 花魚尾 下学之上(下) 丁数

丁数、上三十一丁(内序三目錄二) 下四十九丁(内目錄一)

卷末遊紙に、享和四年僧吟靜購求の識語あり 戸川残花旧藏

日本釋名 半紙本三卷六冊 二〇九 2

貝原篤信著 元禄十三年京版

刊記 元禄庚辰之歲京都書林上島瀬平・長尾平兵衛全梓

半紙判 單辺 九行

萬葉、和名などより採れる名語の語源、所説ま、独断に渉る、

言葉よせ 中横本一冊 帙 一七九 3  
野々口立圃撰 無刊記 明暦頃刊

美濃半切横判 單辺 十三行 総百五十七丁、卷尾一丁欠

(他本に依れば其一丁表、本文裏 左の刊記を存す

寺町二条上ル町 重徳板行)

版下立圃自筆、いろは別俳諧用語集なり

諺草 半紙本七卷七冊 二一九 4

貝原好古輯 貝原益軒校 元禄十四年京版後摺

刊記 元禄十四年辛巳春正月吉旦、茨城多左衛門・田中庄兵

衛合梓、但卷尾に柳枝軒藏板益軒貝原先生書目一葉 享保六

辛丑歳と記す、以て同年の後摺歟

半紙判 單辺 九行 丁数 六八、五〇、三八、一七、四三、

六三、三一丁

諺をいろは別に配列解説す、好古元禄十三年没 年三十七

箋注和名類聚抄 中本十卷十冊 帙 袋付 一九四 5

源順撰 狩谷掖斎著 大正十年印刷局朝陽会再版(原刊 明治十六年印刷局版) 美濃半切 双辺 十行 廿一字、文政十年掖斎校例提要、を載す、(巻頭)

巻尾に松崎明復撰掖斎墓碣銘あり、

類校注釋金壁故事 大本五卷二冊 二五五 6

明鄭以偉輯 黃正慈梓 明版の和刻 松會開板

刊年不詳、刊記 五卷終丁に右の如し 杉浦丘園旧藏

寸法 二八×一九・八糎 雙辺 九行 廿二字 茶表紙 書

題笈

版心、花魚尾 金壁一卷 丁数、絵入

丁数 才一冊三三、二六 才二冊二八、一四、二九丁

著者は萬曆の進士、後礼部尚書たり、古今有名なる故事を蒐

む

五雜組

明謝肇淛著 半紙本十六卷八冊 三 7

明版の和刻 寛文元年刊本の松梅軒、求板 享保寛延の間後

刷、刊記 才十六卷終丁に寛文改元辛丑仲冬とあり以下削る、

表紙裏奥付 皇都書林 松梅軒 以下連名七氏、中川茂兵衛 西村市郎右衛門、植村藤右衛門、河南四郎兵衛 長村半兵衛 長和郎助 小林庄兵衛。

半紙判 雙辺 九行 十八字 版心 黒口魚尾、巻数 丁数、

丁数 三七、四一、四八、五一、四三、三四、三八、四七、

五一、四一、四二、四六、四一、四〇 五三、四六丁、総六

九九丁 渋江抽斎旧藏

雜考の書、天地人物事の五類に分つ、

酉陽雜俎 前集大本廿卷六冊 續集大本十卷四冊 二四九 8

唐段成式撰 明毛晉訂 毛氏汲古閣津逮祕書本の和刻、元禄

十年京板、

刊記 元禄十龍集丁丑年林鐘辛酉日帝畿官風坊書林 山下氏

半六 中村孫兵衛 井上忠兵衛藏板

大美濃判 單辺 九行 十九字 注十八行、

話柄を三十六篇に分ちて述ぶ、詭怪の談多きも 遺文祕籍往々

にしてその間に錯出す、

開元天寶遺事 大本一卷一冊 七九 9

五代太原王仁裕撰 寛永十六年京板 但同年風月宗智刊の後

印

刊記 寛永十六年仲秋吉日 二條通鶴屋町田原仁左衛門刊行。

本書の原刊は南宋 紹定元年戊子刊。

美濃、唐本判 雙辺 十行 十八字 墨付三十七葉 木村兼

葭堂、幸田成友旧藏

撰者鐫京に至り民言を拾ひ 本書百五十九条を得と云ふ、唐

代の遺事此書に依て存するもの多し、

蒙求標題俚諺鈔 小本三卷一冊 二二一 10

一唯軒毛利貞斎（瑚珣）著 宝永三年京板

刊記 宝永<sup>丙</sup>授衣穀旦<sup>戊</sup> 勸学堂 並河次郎兵衛 駒井五郎

兵衛藏板

美濃四半切 無辺 四行 注十六行 墨付 五十七丁

卷頭李先生像 鼈頭注解、五代晉の李渾著の蒙求三卷の注解

也 安永八年村上勘兵衛板あり（割印帳）

日本書籍総目録 大本一巻一冊 複三 11

新成實堂叢書才五冊 昭和七年民友社複製

正徳元年新井白石手写 識語 辛卯正月在洛之日得異本二部

再校了君美識 美濃判 無辺 十行 総三十五丁 附載 蘇

峰学人解説五丁

廣益書籍目録 小本五卷五冊 一九一 12

扉題 本朝彫刻廣益書籍目録大全作者付大意

俗称 五の目録 元禄五年京板

刊記 元禄五<sup>壬</sup>申 歳梓行、洛陽書林、永田調兵衛 西村市郎

右衛門 坂上藤兵衛 八尾市兵衛 重校訂。半紙半切横判

十二行 野入

書林刊部類別作者付書目、版心、書籍大目録

横山重氏によれば 家藏本は元禄五年板の才三印本に属す、

本書は刊行後 享和元年「合類目録」の出版まで 屢々重刷

せらる、

増益書籍目録 小本六卷六冊 一九二 13

河内屋利兵衛編 元禄九年河内屋刊本の 宝永三年求板、

刊記 宝永三年中冬日再校 丸屋源兵衛刊

半紙半切横判 十二行 無罫、いろは別板元値段付書目

卷首河内屋序、「于時元禄九丙子のとし孟春日」はその俣と

す、

元禄九年河内屋板を 丸屋源兵衛求板して 元禄十一年再摺、

更に増補して宝永三年再摺、後同六年再摺。林若樹旧藏、

辨疑書目録 半紙本三卷三冊 帙 一八〇 14

中村富平撰（永原屋孫兵衛）

宝永七年京版

刊記「宝永七年歳次庚寅林鐘吉旦 京都書林 永田調兵衛藏

板」半紙判 單辺 十行

丁数 七一、四二、三九丁 卷末自跋「宝永六年十一月中村

富平跋」戸川残花旧藏

近代名家著述目録 横小本八卷五册 二五 15

堤朝風撰

天保七年 英大助、和泉屋合板

刊記、「天保七年五月江戸書林本石町十軒店英大助 横山町

三丁目和泉屋金右衛門」

但此刊記本石町以下埋木也、

美濃四半切 横判 濃緑表紙 單辺 有界 十六行、每行十

字、巻頭文化八年清水浜臣序 朝風自序 本文初頭に萬笈堂

英遵補足とあり、英遵は平吉と称し 大助の父なり、

森銃三氏に依れば、原刻は文政中 西村源六、英平吉合板に

て半紙判、再版は天保七年 版元右に同じく半紙判なり、隨

て前掲本は平吉歿後 大助の後印なり

江戸時代の書目 半紙本一册 二九〇 16

（杉浦丘園編 雲泉莊山誌卷二）

昭和四年 私版 活版 二百部

半紙判 料紙 出雲半紙 新村出序五丁 百二頁 口繪十六

葉

丘園家藏本のうち 江戸期の書目を蒐む

家藏松會板の書目 半紙本一册 二八九 17

杉丘<sup>(小)</sup>丘園編 雲泉莊山誌別冊才四

昭和九年 私版 活版 二百部

半紙判 墨付二葉三十四頁 口繪五葉

松會板百三十一種を分類列挙し 畧説す、

款識彙例 小本六卷二册 帙 二八一 18

久米邦武撰 慶應二年成る

明治四十四年 談書會刊 活版

美濃半切 雙辺 十行 廿一字 上冊一―三卷 七十五丁

下冊四―六卷 八十八丁 明治四十四年自序、

書画落款例 姓名 年月等記載例 本邦中國古今に亘りて豊

富に蒐集、解説す、

嘉永武鑑 小本三卷三册 八 19

須原屋茂兵衛編 嘉永四年刊

刊記、才三巻末「嘉永四辛亥年江府書林日本橋通巷丁目 千鐘房 須原屋茂兵衛藏版」

美濃半切 單辺 丁数 一九〇、一七七、一一七丁、千鐘房

略目録七丁 卷一及卷二 御大名衆 卷三 御役人衆を記載す、

成算堂善本書目 大本二冊袋付 二八六 20

蘇峰先生古稀祝賀記念刊行会編

昭和七年、民友社刊 特製百部 活版

美濃判 袋綴 藍無地表紙 27.4×19.8

題簽「成算堂善本書目 乾（坤）」

單辺 15.1×10.4 行数不同 頁数 乾一九五 坤二二二頁

昭和七年蘇峰序九頁

徳富蘇峰藏成算堂書庫善本を、旧鈔、旧刊、朝鮮、宋刊、元刊、明刊 等に五分して収載す 慶元以後の古活字印本にして実に三百部を逾ゆ、

巻頭遊紙に「蘇峰迂生」の献呈自署を存す

伊達家本金句集 写大本一冊 複七二 21

昭和十四年貴重図書影印刊行会刊 影印

撰者不詳 慶長寛永頃写

美濃判 料紙共表紙 27.9×19.5 題簽無く手書「金句集」

本文 無匡郭 半葉九行 全四十五葉 墨付四十一葉 印記

「伊達伯観瀾閣図書印」

付 伊達家本金句集解説一冊 吉田澄夫著

本書は道徳上或は宗教上 金句箴言を集めて童幼教育の資となしたるもの

武江年表 大本八巻八冊 七三 22

齋藤月岑編（名、幸成）嘉永元年成る

嘉永三年 須原屋伊八外四店合板

刊記 前編卷四末奥付及後篇卷八末奥付に同一の刊記を載す、

「嘉永三年庚戌十一月刻」發行書林「大坂心齋橋北久太郎

町」河内屋喜兵衛」同心齋橋通博勞町」河内屋茂兵衛」同

心齋橋通安堂寺町」秋田屋太右衛門」江戸日本橋通二丁目」

須原屋茂兵衛」同浅草茅町一丁目」須原屋伊八版」

尚卷四末廿七丁裏に 次の刊記あり

「嘉永二年己酉十月刻」發行書林「大坂心齋橋通博勞町」

河内屋茂兵衛」江戸日本橋通一丁目」須原屋茂兵衛」同浅

草茅町一丁目」須原屋伊八版」

即ち原刻四卷の刊記をそのまゝ、残せりと覺し、



美濃判 洪引表紙 25.9×18.2

元題箋「武江年表一」(一八)

扉題 表紙見返に、「武江年表」江戸書舖 青藜閣「魁星朱

印あり、

單辺 半葉十一行 注雙行 平仮名交り

卷次 一 二 三 四 五 六 七 八

丁数 三〇 三三 三三 二八 二六 二七 三三 三三

計

二四二丁

嘉永二年源瑜序三丁 亀田鵬齋詩一丁 月岑提要一丁半 青

藜閣附言半丁 卷八末正誤一丁、

本年表八巻は正篇、後に讀篇四巻を著す、正篇は天正十八年

より嘉永元年まで、続篇は翌年より明治六年まで 通計二百

八十四年間に亘り、江戸府内外の事柄を年表体とせるもの、

記事は地理の沿革、風俗の変遷 巷談等、考証正確、江戸史

研究上十分参考とし得るものなり、

新撰洋学年表 大本一冊 三一— 23

大槻如電著(名、修)

昭和二年 大槻茂雄 私版

美濃判 袋綴 浅黄色浪千鳥模様表紙 26.9×19.7

題箋「新撰洋学年表」扉題(表紙見返)「大正十五年十一月」

新撰洋学年表」抜抄自在  
但記書名大槻如電修」

年表本文 單辺 行数不同 総百七十四頁

卷頭 例言一頁 索引十六頁 本文百五十八頁 後序一頁

「大正十年三月七十七叟大槻如電」

本著は さきに明治十年上梓したるもの、更に増補改訂し、

しかも版下全文蠅頭大の細字を以て自筆書写せられたること、

到底八旬老翁の技とも覚えず、年表は天文元年に始まり明治

十年に終る 三四四十五年間の南蛮紅毛關係 政治經濟 学

術 風俗一切の事項に亘る

墨場必携 中本六卷二冊 三二— 24

市河米菴輯 山内晉、渡辺靴校

明治十三年 京 鴻宝堂翻刻

美濃半切 濃紺無地表紙 題箋「墨場必携」(卷) 内題「墨

場必携卷之一」(一六)

單辺 有界 九行 廿字 版心「墨場必携」魚尾、巻数 張

数、

冊 一 二 計

巻次 一 二 三 四 五 六 六卷

張数 五〇 四〇 六一 五二 四〇 六〇 三〇四張

林檎字序三張「歳在丙申季夏中浣二日檉字乾」(丙申、天保

七年) 佐藤一斎弁言三張半「天保七年荷月上幹、一斎老人佐

藤坦手識」

書画幅臨場に使ぜん爲 古今の名句佳章を蒐め 之を四季に

分ち字数によりて配列す 又諸家の座右銘 数多を収む

江戸時代初期繪入本百種 大本二冊 帙 二九三 25

月曜会代表亮氏祐祥編

昭和二年 京 杉田大学堂刊 活版 限定二七〇部

美濃判 鉄無地表紙 康熙綴

本文 無郭 半葉十五行

上巻 繪入仮名草子、古淨瑠璃、支那朝鮮旧刊本八十七部に

関する挿繪又は本文の影印図版 一三八頁

下巻、右諸本の解説 六六頁

上巻首、白水郎序三頁 凡例目次一〇頁

假名草子 大本二冊 複三〇 26

水谷不倒撰

大正十四年 大洋社刊 再版 活版

大美濃判 袋綴 濃紺無地表紙 29×20.3

題箋「仮名草子上」(下) 本文雙辺 21.3×14.8 行数不同

巻次 上 下 計

丁数 四七 三四 八一頁

図版 三二 三六 六八頁分

上巻首大正八年坪内道遥序二頁 自序二頁 凡例二頁 仮名

草子解題四頁 総目録三頁 跋なし

仮名草子の中 繪入本三十一種につき 原表紙、本文の終始

丁或は挿繪を完全に覆刻し 以て仮名草子の全貌を髣髴せし

む 全く現時贅沢至極なる試みと云ふべし、

注 本書初版は大正八年 大洋社刊、

西鶴本 大本二冊 複五八 27

水谷不倒著

大正九年 水谷文庫 私版 活版

大美濃判 黒表紙 28.8×20.3

題箋「<sup>浮世</sup>草子西鶴本上」(下)

本文 雙辺 十七行 三十字

頁数 上五二 下三四頁 自序二頁 総目録五頁 凡例一頁、

西鶴自画像、自筆自画色紙模刻四葉 西鶴本廿四種につき

その表紙、挿絵の模刻

図版 上四二 下七七頁分、

実は大西鶴鑑なり、

繪入淨瑠璃史 大本三冊袋付 複五七 28

水谷不倒撰

大正五年 精華書院刊 私版 活版

美濃判 黄土色牡丹花模様空押表紙 27×29

題箋「繪入淨瑠璃史上」(中、下)

本文 雙辺 半葉十七行 廿九字詰

卷次 上 中 下 計

頁数 一一四 一一二 一二六 三三二頁

覆刻図版 三九 五二 七九 一七〇頁分

自序六頁 凡例四頁 総目録七頁

徳川初期の古淨瑠璃正本、寛永丹緑等を蒐集、内五十一種に

ついて模刻図版を作成、之等を挿絵、本文の標本とし、其間

之等の史の見解を敘術せり、之等の題材は全く前人未倒の境

地として その研究は高く評價せらる、

慶長以來書買集覽 半紙本一冊 二八八 29

井上和雄編

大正五年 京 彙文堂書店刊 活版

半紙判 袋綴 赤地に本屋店頭を描きたる表紙

題箋「慶長以來書買集覽」

扉題、題名上に魁星朱印あり

本文雙辺 行数不同 全一三三頁

新材出序一一頁 自序三頁

江戸期の出版書肆名、住所、發兌書店等を刻明に調査記録す、

列挙の書店数一、一四〇名に及ぶ、

稀書複製會刊行稀書解説 中本五冊 三三三 30

稀書複製會同人撰

大正九年より昭和三年に至る 米山堂刊 活版

美濃半切 袋綴 茶表紙 本文雙辺 十六行

篇数 一 二 三 四 五 計

頁数 六九 七七 一一二 一五六 一一四 五篇

総て稀書複製會刊行書に関する解説なり、之を一期毎に一篇

となす 本五編は才一期より才五期に至る分也、

一篇 廿七部 二篇 廿五部 三篇 廿七部 四篇 三十二

部 五篇 廿七部を収載す、

注、本解説は爾後期毎に刊行せられ 才十期 昭和十二年

才十篇を以て終れり、

三十六歌仙像を休息態に画き 華彩色を施し花月の句を配す

# 汲古儲藏志 卷八

美濃判 廿三丁、哥仙華彩

貞徳狂歌集 大本三卷三冊 複三九 3

稀書複製会才四期

松永貞徳詠 菱川師宣画 天和二年江戸版

刊記 天和貳年戊初秋中旬絵師菱河吉兵衛「江戸堺町 柏屋

与市開板」美濃判 四十五丁

狂歌入絵本 師宣作の白眉 高野斑山旧藏

武信狂歌旅枕 大本二卷二冊 複八三 4

稀書複製会才五期

野々村信武詠 天和二年江戸版 菱川師宣画

刊記 天和貳年戊初秋上旬 絵師 菱川吉兵衛「江戸おやぢ橋

本問屋」酒田屋開板」角書 信武：京都名所絵入

美濃判 十五、十八丁 單辺 十六行 絵入

いなご 中本二卷二冊 複八〇 5

稀書複製会才五期

北村季吟撰 斎藤如泉画 明暦四年成立 無刊記 季吟私版

推定 明暦五年刊

半紙判 單辺 上三十 下廿二丁 絵入句集

狂歌・誹諧

讀本・滑稽本・洒落本

咄本・草雙紙

隨筆等

索引

## 八、狂歌俳諧

犬百人一首 半紙本一冊 複六五 1

稀書複製会才一期複製

幽双庵作 奥書 寛文九<sub>己</sub> 酉歳中夏上旬

林若樹氏に依れば寛文九云々は埋木、挿絵風俗より考へ 寛

文以前の開板と推せらる、半紙判 單辺 狂歌入絵本

休息句合 大本一冊 複四九 2

稀書複製会才三期

野々口立圃作、自画白筆、萬治寛文頃刊

甲子吟行 中本一冊 複七四 6

明治書院複製佛書三珍之一 昭和七年

松尾芭蕉作自筆、山口素堂跋 刊年不詳

美濃半切 無辺 廿八丁 附載伊藤松宇解題

別名野さらし紀行

江戸名所百人一首 半紙本一冊 複四二 7

稀書複製会才一期

近藤清春画 元文中人形町通(平)ひらのや刊

奥書、畫工 近藤助五郎清春筆作也

半紙判 百人一首の狂詠に大津繪を附したるもの、華彩

### 九、讀本、滑稽本、洒落本

繁野話 半紙本五卷六冊合一冊 一一二 1

近路行者(都賀庭鐘)作 明和三年江戸大坂合板

刊記 明和三丙(三)戌年正月」江戸通本町三丁目西村源六、大坂

心齋橋筋順慶町柏原清右衛門、同通り北久太郎町山口屋又一

郎」

半紙判 單辺 十二行 絵入 青色表紙 茶題簽 角書 古

今奇談 丁数 十七、十七、廿、十七、五卷上十二、下十八、

総百一丁

同著英草紙前篇に對し 本書を同後篇と稱し 讀本發生の動

因となれる書なり

當世下手談義 半紙本五卷五冊 一六七 2

静觀房好阿作 無刊記 大和田板の奥村求板款

半紙判 單辺 十行 絵入 丁数 十四、廿一、廿三、十二、

十三、総八十四丁

全冊元題簽 青色表紙 柱刻 教訓下手談義 滑稽本

注、東大藏本刊記、「宝曆二申正月吉晨、東都書林大和田安

兵衛大坂屋又右衛門板」、家藏本は才四卷末に 芝神明前

奥村喜兵衛の藏板目錄二丁半を附す、その中 浪江節用集、

和漢衆画苑、絵本江戸みやげ等より見て 家藏本は大和田

板を求板して 宝曆明和頃の後摺と推定せらる、

教訓差出口 半紙本五卷五冊 二六五 3

伊藤單朴作 宝曆七年成る、宝曆十二年大坂江戸合板

刊記 宝曆十二年(壬午)正月乙未元旦」大坂心齋橋南四丁目吉

文字屋市兵衛」江戸日本橋通三丁目同次郎兵衛」全書因家精

工奥牟羅次助」

半紙判 單辺 十行 絵入 柱刻 さし出口 青色表紙

丁数 廿、十五 十五 十八 十五 墨付総八十三丁 宝曆八年青柳野人跋 滑稽本

注、右跋に依れば 單朴は宝曆八年歿したれば 本書は遺稿集と云べし、

續膝栗毛 中本十六冊、九冊欠 二七三 4

十返舎一九作 自画其他 十二編廿五冊なれども家藏本は次の如し、二編上、三ノ下、四上下、五上、六下、七上下、八上、九上下、十上下、十一上下 十二下。文盛堂紙屋利助求板再摺、刊年不詳

刊記 十二編下冊末に、「江戸本所相生町壹丁目」紙屋利助板」

美濃半切 薄鼠標紙 單辺 八行 絵入 滑稽本

膝栗毛八編の後を受けて 續編は原刊文化七年より文政五年まで十二編を村田屋、西村屋、鶴屋、伊藤弥兵衛 相継いで版元たり、次に天保五年和泉屋市兵衛（甘泉堂）全巻を求板再摺し、紙屋板は更にその後の求板再摺なり、

紙屋板は原刊に比し、口絵を殆省畧すれども 編次等異なることなし、

北州異素六帖 小本二卷二冊 複九五 5

稀書複製会才五期

澤田東江撰 宝曆七年江戸板

刊記 宝曆七丁<sup>丑</sup>歲正月吉日「書林」東都淺草御藏前茅町二丁目「六河亦次郎板」木材木町四丁目「柴田弥兵衛全」

半紙半切 單辺 八行 絵入 総四十五丁

新吉原主題の洒落本なり、

古今咄の繪有多 中本一冊 複九九 6

稀書複製会複製才五期

南蛇加紫蘭作（窪俊滿）北尾政演画

刊記 安永九年正月 通油町 松村弥兵衛板

美濃半切 單辺 絵入、総廿二丁 洒落本型

画と書入にて簡短に万遍なく 遊郭吉原を説明したる案内記、

絵題簽付

新説百物語 半紙本五卷五冊 帙 二三四 7

高古堂主人作（氏名不詳）讀本

明和四年京版 刊記 明和四亥春「京六角通油小路西へ入町」

書林 小幡宗左衛門板」

半紙判 青表紙 寸法 22.4×15.4cm 題簽欠

内題「新説百物語卷之二」單辺 十一行 絵入

丁数 十四、十五、十五、十四、十五 挿絵 各巻四頁分

摺痛多く良からざれとも 挿絵 西川風にて好し

傾城評判記 半紙本一冊 複九八 8

稀書複製会才五期複製 昭和三年刊

作者不詳 吉原遊女評判 安永七年江戸版

綴じ曆に擬して作る 始めに「江戸傾城評判所 十八大通撰」

終りに「安永七年出 立評測傾城気象者」とある、

半紙判 五丁

### 十、咄本、草雙紙（赤本、黄表紙、合巻）

軽口大矢数 小本一冊 複二二 1

稀書複製会才六期 咄本

作者、刊年不詳 刊記 豊笑堂「米澤彦八」

半紙半切 墨付廿一丁 單辺 十三行 絵入

注、本書は五卷五冊、元禄中刊なり、宝暦三年再版、

鹿の巻筆 半紙本五卷合一冊 複一 2

雅俗文庫（大阪）復刻 明治四十三年活版 咄本

鹿野武左衛門作 古山師重画 貞享三年江戸版

刊記 作者鹿野武左衛門「絵師古山太郎兵衛」貞享三年<sup>丙寅</sup>

二月吉日「江戸通油町」南青物町「開板

半紙判

注、書中「堺町馬の顔見世」の内容不穩なりとして 著者遠

島 板木絶板を命ぜられたり

正直咄大鑑 半紙本五卷五冊 複一〇四 3

稀書複製会才四期

石川流舟作 菱川師宣画 元禄七年江戸版 貞享四年成立

刊記 作者 石川流舟「日本絵師 菱川師宣」元禄七<sup>甲戌</sup>九

月日「江戸日本橋万丁」万屋清兵衛板

半紙判 單辺 十二行 絵入 丁数 十五、十四、十二、十

四、十五、

注、原刊は貞享四年刊

武左衛門口傳咄 大本二卷二冊中卷欠 複八四 4

稀書複製会才五期

鹿野武左衛門作 菱川師宣画 天和三年江戸版 咄本

刊記 大傳馬三町目「鱗形屋開板

大美濃判 單辺 十四行 絵入 丁数 上十五、下十二丁

中巻あるも發見し得ざりし爲 複製に及ばず

ねこ唄大友のまとり 中本一冊 複九一 5

稀書複製会才五期 赤本

近藤助五郎清春画 無刊記（享保中 江戸湯島天神女坂 相模屋板）美濃半切 丹表紙 総五丁

注、赤本に始まる五丁一冊の原則、黄表紙 合巻を通ずる 定則となれり、

ぶんぶくちやがま 中本一冊 複九二 6

稀書複製会才五期 赤本

近藤清春画 無刊記（享保中 井筒屋板）

美濃半切 丹表紙 総五丁

金々先生榮花夢 中本二卷二冊 複九六 7

稀書複製会才五期 黄表紙

恋川春町文并画 無刊記

刊年等を奥付出版目録より推定するに、安永四年大傳馬町鱗

形屋孫兵衛板なり、

表紙に短冊形題簽及色紙形絵外題あり、共に彩色、

大美濃半切 單辺 総十丁

黄表紙中の白眉、最も世に喧傳せらる、

三舛増鱗 祖 ミマスマスウロノハシメ 中本三卷三冊 複九七 8

稀書複製会才五期 黄表紙

恋川春町文并画 安永六年 鱗形屋板

大美濃半切 総十五丁 表紙に色摺題簽及貼絵外題を添う、  
絵入

黄表紙の変わり種、当時評判の団十郎艾と地本問屋の廣告宣傳  
を書綴る、随分讀手を茶にしたる出版也、

従夫ソレカウイライキ以來記 中本三卷三冊 複一〇一 9

稀書複製会才五期 黄表紙

桂川中良作 喜多川哥磨画 天明四年鳶屋重三郎板

美濃半切、單辺 総十五丁 絵入

黄表紙名作中 最も巧妙に世相を皮肉りたるものと称せらる、

注、中良、森羅亭萬象と号し、蘭学者、狂名竹杖爲輕、本書

は其処女作、

カクシヤウキヤウキウツラン 方言 金草鞋 中本十七冊八冊欠 二六四 10

十返舎一九作 月麿外八名画 合巻仕立滑稽本

江戸馬喰町二丁目 錦森堂 森屋治兵衛板

全廿五編廿五冊 文化十年初編 天保五年廿五編刊 内家藏

は初篇、二、六、八、十、十一、十五、廿二、計十七冊

美濃半切、紺表紙 大形黄色絵外題 毎丁絵入、丁数 各冊

三十丁、初摺、全冊の絵外題誠に珍とするに足る、

未曾有の大當りの膝栗毛の全勢を駆りたる狂歌旅行の一作な



り

明鴉墨画酒桶襦アケガラスミエノウチカガ

中本九篇三十六册六篇欠 二二八 11

刊記 右此哥八直之以正本令板行者也「江戸さかい丁」中島屋伊左衛門板

三亭春馬 後二世種彦作 二世梅蝶楼国貞画 合卷

大美濃半切 單辺 十六行 絵入 総十丁

南傳馬町一丁目 紅英堂 葛屋吉藏板

享保よみ賣はやり唄 大折本一帖 複九三 14

家藏 初篇より九篇まで 各篇四册を上下二册に合綴、各篇

稀書複製会才五期

袋付 総三十六册

享保年間讀賣りの流行唄十一枚を合綴したるもの、後世の互版なり 依て書名あることなし、江戸版

刊年、初一三篇 万延二年、四、五篇 文久二年 六、七篇

美濃判 大折帖、

文久三年 八、九篇 元治二年刊。(爾後十〜十五篇を慶應

長哥こきんしう 中本一册 複二四 15

元〜三年に刊行す。) 美濃半切、錦絵摺表紙 藍刷口絵 各

稀書複製会才三期 大正十三年刊

葉絵入 丁数は一篇 四册 二十丁、内口絵三丁、

編者不詳 菱川師宣画

浦里 時次郎の芝居話、

天和二年刊

一之富當眼草稿 中本一册 複一〇三 12

刊記 卷末に「天和二年」正月日「わしや新板」

十返舎一九 自筆稿本 影印 合卷

美濃半切 黒表紙 203×146 題箋、内題「長哥こきんし

美濃半切 絵入、十五丁 文化三年成る

う」本文、單辺 初丁半葉十一行 才二丁以後半葉十五行

注、右は文政二年刊行、せらる、

柱刻なし 墨付十四丁

稀書複製会才五期、

挿絵 遊女凶廿五面 序文一丁 跋半丁

吉原はやり小哥総まくり 中本一册 複五四 13

稀書複製会才二期

撰者不詳 延宝天和頃 江戸版

吉原に於ける流行唄を集め 遊女の姿絵を加へたるもの、所

収唄廿二種、

収唄廿二種、

十一、隨筆等

崎陽志 写本大本一冊 三六 1

一名長崎大記 明和八年神沢清左衛門写

美濃判 十一行 六十丁(墨付)

長崎興立の事 其他六十条

落穂集(追加) 写本半紙本十一卷四冊 一〇〇 2

大道寺友山撰 享保十三年脱稿 外、内題落穂集とあるも

内容は落穂集追加(別称異本落穂集)に同じ 又三十卷本落

穂集とは全く別本なり

半紙判 十行 全六十二條 丁数 冊毎 五二、四八、三八、

五〇丁、

落穂集追加は十一卷を正しとす、文政中戸田氏徳に據る、

落穂集追加 小本十卷二冊 二八四 3

史籍集覽本 明治十七年近藤瓶城刊

友山撰、第十一卷を欠く 全五十八条 百四十丁、

環斎記聞 小横本一冊 一六一 4

鎌田環斎編 無刊記 文化頃刊

半紙半切 十四行 江戸旧記

青標紙 写本半紙本二卷二冊 一五四 5

大野廣城著 天保十一、二年頃成立

半紙判 六十四丁 十二行 図入

武家の法制 典故を収録、幕府の忌諱に觸れ罪せらる、

夢物語 附<sup>(マ)</sup>華山一件 半紙本写本一冊 七二 6

高野長英著 天保九年十月稿

半紙判 廿五丁、

英船モリソン号来航の風聞により その打攘ふべきにあらざ

ることを論ず 爲に終身禁錮に罪せらる、

<sup>(マ)</sup>華山一件は連坐せる渡辺<sup>(マ)</sup>華山の獄中口書其他、

美作略史 半紙本四卷四冊 二四七 7

矢吹正則著 明治十四年矢吹金一郎板

半紙判 双辺 十一行 廿二字 片仮名交り

津山藩士の編纂せる作州編年史

おあん物語おきく物語 大本二卷一冊 九七 8

朝川善庵跋 江戸 浅倉屋九兵衛求板再摺

原刊 天保八年三可書屋刊 美濃判 絵入

おあん物語 女性おあん(尊称)の著 慶長五年関ヶ原の戦

に大垣落城の実見談、おきく物語、おきくなる女性による大

坂落城（元和元年）の見聞談、何れも口語。

采覽異言 半紙本五卷二冊 一四二 9

新井白石著 大槻文彦校 明治十四年 白石社刊

半紙判 双辺 十一行 廿五字 漢文 活版

養生訓 半紙本八卷四冊 二六一 10

貝原益軒著 正徳三年成立 天明九年 大坂 海部屋板の後

印、文化九年 大坂 多田勘兵衛板

半紙判 單辺 十行

著作堂一夕話 半紙本三卷三冊 二四一 11

滝沢馬琴著 享和三年自序 無刊記 享和三年 葛屋重三郎

板の後印

半紙判 單辺 十二行 絵入 前年上京旅中の異聞、

烹雜の記 大本二卷二冊 二七九 12

滝沢馬琴著 文化八年 江戸 柏栄堂柏屋半藏板

美濃判 單辺 十行 貼外題目録、

著者の才二隨筆集

玄同放言 大本三卷六冊 四〇 13

滝沢馬琴著 渡辺華山、滝沢琴嶺画

才一集 一、二卷三冊 文政元年、才二集 三卷三冊 文政

三年 丁字屋平兵衛板 美濃判 單辺 十二行 絵入  
著者の才三隨筆集

北窓瑣談 大本七卷七冊欠續篇一冊、二五二 14

橘南谿著 正篇四冊統篇四冊 近世隨筆の白眉、

無刊記 文政十二年原刊の後印

美濃判 無辺 十行 絵入

（注）本書別に 文政八年刊三卷本ありて 内容多少異同す

甚紛し、

南畝考言 大本二卷二冊 八七 15

大田南畝著 文化十四年 角丸屋甚助板

美濃判 單辺 十二行 杏花園自序 板下門人文宝亭 墨付

上卷四十一 下卷三十九丁、

（注）下卷 才世三丁欠、才世二丁重複、

假名世説 半紙本二卷合一冊 八六 16

大田南畝著 文政八年 角丸屋徳三郎板

門人文宝堂補 半紙判 單辺 十一行 総六十三丁

山崎美成序、南畝肖像 唐土の世説に倣ひて 慶長元和以降

の土の言行を蒐む

擁書漫筆 大本四卷四冊 二一 17

- 小山田与清著 天保二年 丁子屋平兵衛求板 原刊は文化十四年、文化十三年大田南畝序 北慎言跋
- 美濃判 單辺 十一行 丁数 墨付 三八、三六、三九、五五丁
- 骨董集 上篇 三卷四冊合一冊 三一 18
- 山東京傳著 文化十年大田南畝序(上卷) 文化十二年自序(下卷) 天保七年 丁子屋平兵衛後撰
- 卷末に 骨董集三篇四卷の近刻予告あるも 遂に未刊
- 美濃判 無辺 十二行 插图多数、近世初期風俗の考証を主とする孝証体隨筆といふべきものを確定す、
- 原刻 文化十二年 鶴屋喜右衛門板 二冊
- 近世奇跡考 半紙本五卷二冊 七五 19
- 一名續骨董集 山東京傳著 明治初年 松山堂藤井利八求板
- 原刊 文化元年 大和田安兵衛板(五冊)
- 半紙判 單辺 十一行 絵入 丁数、上三九 下四八丁 文
- 化元年亀田鵬齋序
- 歴世女装考 大本四卷四冊 八八 20
- 岩瀬百樹(山東庵京山)著 明治初年 京、津速堂吉野屋大
- 谷仁兵衛求板 原刊 弘化四年板
- 美濃判 單辺 十二行 図入 丁数 三一、三三、三三、三五、五丁
- 還魂紙料 大本二卷二冊袋付 九五 21
- 柳亭種彦著 文政七年脱稿 文政九年 江戸 鶴屋喜右衛門、西村屋与八合梓
- 西村屋与八合梓
- 大美濃判 單辺 十二行 図入 丁数 三三、三三丁
- 京傳に繼で考証体隨筆を更に推進め 精緻ならしめたり、
- 用捨箱 大本三卷三冊 一二〇 22
- 柳亭種彦著 天保十二年十月 江戸 英屋文藏板
- 美濃判 無辺 十一行 図入 丁数 二九、二五、三〇丁
- 種彦の才二考証体隨筆、種彦は天保十三年歿
- 用捨箱 大本三卷三冊 二八 23
- 種彦著 明治廿三年 東京 相原政次郎求板
- 美濃判 同上、丁数も同じ
- 高尾年代記 半紙本一冊 四七 24
- 柳亭種彦編 明治三十二年 堀野書店求板
- 原刊 嘉永二年、半紙判 墨付 四十一丁
- 町人囊 半紙本五卷五冊 一二三 25
- 西川如見著 享保四年 茨木多左衛門板、

半紙判 單辺 十行

町人の心得、学ぶべき教訓を説く

町人囊底拂 半紙本上巻一冊（欠下巻） 一二四 26

西川如見著 茨木多左衛門板

半紙判 單辺 十行、町人囊を補遺せるもの

新鑑草 大本九巻合一冊 一五八 27

光風子作 宝永八年 京 岡本半七、江戸 升屋五郎右衛合つと

板 美濃判 單辺 十行 絵入 墨付 百三十八丁

唐土の人物を引て勤善懲悪を説く、三十三話、西荘文庫旧藏

理齋隨筆

志賀理齋著 大本六巻六冊 二〇一 28

天保八年 須原屋茂兵衛板 美濃判 單辺 十行 総一六六

丁 犬養木堂旧藏

学問のならず滑稽味ある記事多し

堪忍袋

僧行願著 大本一冊 六九 29

宝暦七年 江戸 大坂屋又右衛門板

美濃判 單辺 九行 絵入 墨付 廿九丁

本出版書肆は静観房の當世下手談義を 宝暦二年に上梓した

る者、之に倣ひて本書の如き処世教訓書を出版したりと見ゆ、

（挿入紙・MANPEI HOTEL用箋）

大坂屋又右衛門 富春堂 江戸室町三丁目

堪忍袋一卷 筑波山下行願述 寶暦七年刊 宝暦丁丑金龍山

法善主人亮淵序

藏板目錄に静観房作當世下手談義五冊 同作續下手談義五冊

青表昏五巻等あり

一休和尚法語 大本一卷一冊 一九〇 30

一休宗純作 明暦二年 松會市郎兵衛板

美濃判 單辺 十三行 墨付 十二丁（此項全て単線を以て

抹消さる）

観音和談抄 大本三巻一冊 六一 31

著者不詳 天和三年 江戸 小川彦九郎板

美濃判 絵入

梅園日記 大本五巻五冊 三七 32

北静廬著 朝川善庵序 弘化二年 西宮弥兵衛、英大助合板

美濃判 單辺 十一行

善庵、慎言を評して 貧工なるもその博学洽聞を称す、その

該博なること本書一部を以てして窺ふことを得、

商人夜話草 半紙本三卷三冊 一三九 33

京、上河揚著 柳枝軒序 享保十二年 小川多左衛門板、半

紙判 單辺 九行 絵入

商人の心得ふべき事項を述べたる教訓書、商人亦学問の必要なる所以を説く、

萬葉用字格 大本一卷一冊 二四八 34

僧春登撰 明治初年 浅倉屋久兵衛再摺

原刊 文化十五年 江戸 同人板 或は万笈堂板か

大美濃判 丹表紙 單辺 九行 文化十四年自序 同十五年

狩谷椽齋序

集中の一字一意節の万葉仮名と歌語を 五十音別に集め、夫々

四類八種に分類して彰出 卷数を記す、

棠陰比事 大本三卷三冊 一八三 35

宋、桂萬榮編、元田澤校、山本北山翻刻

寛政六年 青藜閣須原屋伊八板、朝鮮板 和刻

美濃判 單辺 十行 十八字

富岡文庫藏朝鮮本は、双辺 有界 十行 十八字なり、

聽訟彙案 大本三卷三冊 二七六 36

津藩督学津坂孝綽撰 文化三年自序 天保二年齊藤正謙序

天保二年有造館板（稽古精舎版）藩学、

美濃判 黄色表紙 單辺 有界 十行 廿字 丁数 三八、

三七、三五丁、

聽訟訴獄に関する古人判案中 公明なるもの九十四則を集録す、漢文、版刻製本誠に整正なり

祥刑要覽 大本二卷一冊 二七五 37

明呉訥撰 岩村藩教授若山極校 同藩刊

美濃判 單辺 十行 廿字 有界 墨付三十八丁

天保五年校刊自序 呉訥序及後序

諸刑罰を詳に考察し 刑を用ふる方法を説述したり、

劉向列女傳 大本八卷四冊 二六三 38

前漢劉向撰 明萬曆丙午三十四年刊の覆明本

大村西崖校 大正十三年図本叢刊会刊

唐本装 大本 單辺 有界 十行 廿字 絵入 丁数 六五、

五〇、五〇、六〇

玄抄類摘 大本六卷五冊 一一八 39

明、徐渭輯 陳如元註 宝曆四年澤井居敬跋

宝曆五年 澤井居敬藏板 同年刊

京、林伊兵衛 鉛屋安兵衛 石田治兵衛發賣

美濃判 双辺 有界 九行 廿字

此書は徐文長集の所 歴代名家の書訣 書論なり、

略可法 大本二卷二冊 二四二 40

市河三亥輯 市川三千縮臨 文政七年成立

小山林堂刊 私版 美濃判 双辺

條幅篇額の彙例集なり、

襟帯集 大本一卷一冊 複四五 41

南浦文之写の江湖風月集なり、永祿<sup>(十)</sup>己巳十月吉日写

美濃判 総七十二丁

成實堂叢書 大正七年 民友社刊 限才三百五号 複製

右は本文の鼈頭に 松原大恵の講註を詳細に録したるもの、

平洲先生小語 大本一卷一冊 複四六 42

細井平洲著 自筆稿本

美濃判 双辺 有界 九行 廿字 総三十八丁 漢文

附載 平洲先生墓銘 平洲先生碑銘 細井先生行状

成實堂叢書 大正十一年 民友社複製 限三百十二号

經籍訪古志初稿本 半紙本七卷二冊 複二〇 43

森立之編 昭和十年 日本書誌学会複製

海保漁村校 半紙判 單辺 有界 十行 十七、八字

墨付 上七七、下四五丁 袋入

安政二年 小島抱冲写

活版經籍考 半紙本二卷一冊 複二 44

吉田篁墩著 天明八年成立 寛政十一年 狩谷椽齋写

半紙判 有界 九行 廿字

附載 昭和八年川瀬一馬補注解説、安田文庫藏本影印

紙漉重寶記 半紙本一卷一冊 複六七 45

国東治兵衛撰 大正十四年 大阪製紙印刷研鑽会複製

丹羽桃溪画 寛政十年 大野木市兵衛、海部屋勘兵衛合板

半紙判 廿一丁 單辺 九行 絵入

新撰紙鑑 横小本一冊 複一五七 46

京、木村青竹撰 昭和五十七年 紙の博物館複製

安永六年、京、菱屋次兵衛板

附 楷書版(同形)一冊、及解説版(大沢忍、禿氏祐祥)一

冊

風流謡年代記 半紙本一冊 複一〇七 47

稀書複製会第一期 大正九年

作者不詳 宝曆七年 江戸萬屋彦八板

半紙判 單辺 八行 墨付十九丁 鼈頭絵入

謡曲二百番題目内容を編綴して 年代記に擬作す

地錦抄 小本十九卷廿冊 二四〇 48

四代伊藤伊兵衛撰并画 次の三部を含む

増益地錦抄 宝永七年 須原屋茂兵衛板

半紙半切 單辺 九乃至十三行 図入

廣益地錦抄 享保四年 須原屋茂兵衛板

半紙半切 單辺 十一、二行 図入

地錦抄附録 享保十八年 須原屋茂兵衛板

半紙半切 單辺 十行 図入 総冊木箱入

右は三代伊兵衛撰の 花壇地錦抄六卷五冊 元禄八年 志村

孫七板に續くもの、著名なる花卉栽培書也、

江戸當時諸家人名録 小本一冊 五 49

扇面亭編 文化十二年西村宗七板の文政三年改訂版

半紙半切 單辺 廿七丁

同 上二編 小本一冊 六 50

扇面亭編 文政元年 西村宗七板 朝川善庵序

半紙半切 單辺 廿三丁

剪燈新話句解 大本四卷四冊 二六二 51

明瞿佑著 朝鮮林芭 号垂胡子釋

慶安元年京版 慶長元和中刊古活字版の復刻

刊記 慶安元年十一月吉日「二條晴明町并筒屋六兵衛」

大美濃判 代緒無地表紙 寸法 209×124cm 全卷元表紙

の上に 茶色新表紙を宛て改装す、

元表紙題簽、重郭「剪燈新話」(二一四)「内題「剪燈新話句

解卷之一(二一四)」版心、「剪燈新話(花魚尾) 卷数、丁数」

雙辺 20.7×15.6cm 每半葉九行 每行廿字

巻首に洪武三十年凌雲翰序 同十四年吳植引 同廿二年佳衡

序 同十四年金冕跋 巻尾に永楽十八年胡子昂後記 同十九

年瞿佑後序 及 瞿暹刊記を載す、

注、瞿佑は早く洪武十一年 剪燈録四十卷を著はす、後散佚

して胡子昂僅に獲たるもの此の四卷なり、更に朝鮮に傳存し

其林芭本により 古活字版起る、に至れり、古活ハ上中下三

冊本、

慶長見聞集 小本十卷五冊 二八二 52

三浦淨心作 慶長九年成る

明治十七年 近藤瓶城校刊 史籍集覽本 活版

半紙半切 藍表紙 雙辺 十一行

冊 一 二 三 四



卷次 一 二 三 四 五 六 七 八

丁数 二五 二九 三三 三二 二九 二六 二八 二九

五 五冊

九 十 十卷

二四 二五 二六 九丁

自序一丁 大尾に「于時慶長十九年のとし季冬後の五日記之

畢」とあり 瓶城後書二丁

北條家臣淨心（永禄八年より正保元年歿）の見聞したる江戸

の人情 風俗 雅事を記したる隨筆、

塵塚物語 小本六卷二冊 二八三 53

撰者不詳

巻尾に「天文廿一年十一月日藤某判」又巻首才一話に「前飛

鳥井老翁一日語られていはく云々」とあれば 藤原氏のさる

公卿の著と謂ふべし

明治十五年 近藤瓶城刊 史籍集覽本 活版

半紙半切 本文雙辺 十一行

冊 一 二 計

卷次 一 二 三 四 五 六 六卷

丁数 一八 二〇 二〇 二四 一九 二二 二二三 丁

各巻目録一丁 序跋なし

鎌倉室町期の説話、見聞を記したるもの、公武生活の動向に  
関するもの多く、當時の社会事情を知る資料とし得る、

音曲玉淵集 半紙本五卷合一冊 二八七 54

時中翁庚安編 大和田建樹校

明治三十六年 江島伊兵衛刊 再版 活版

半紙判 大和綴 浅黄色浪千鳥模様表紙 題簽「音曲玉淵集  
全」

本文 雙辺 行数不同 総三二六頁 寛保三年今村義福序

明治三十二年大和田建樹序、

能、謡曲の謡ひ方に関して詳説したるもの、但し 所説は現

代の左近が合理的手法に比すれば 遥かに難解なり、

好書雜載 半紙本一冊函 二九五 55

高木文撰

昭和七年 井上書店刊 限定三百部 活版

半紙判 袋綴 鉄色表紙 題簽「好書雜載」

本文 單辺 十六行 目次一丁 函版四丁、本文八十七丁

巻頭遊紙に 井上喜多郎自署 献辞あり

著者は尾州南葵文庫に職を奉じ 古典籍を掌ること十八年、

此間の見聞による慶長元和期に於ける銅活字開板事業、南葵  
文庫の興廢、金沢文庫に関する考等を含む、殊に家康の好字  
を讀ふること甚し、

文房四譜 半紙本二冊帙 一二二 56

和紙研究会 禿氏祐祥編

昭和十六年 京 便利堂刊 活版

半紙判 薄茶表紙 21×14.8 唐本綴

題簽「文房四譜上」(下)

本文 單辺 有界 半葉 九行 廿六字

冊 上 下

卷次 {一二三} {四五} 附録

張數 五八丁 三五丁 五五頁

解題一〇頁 凡例二頁 目次一丁 文房四譜徐鑛騎序一丁

自序一丁

本書は宋蘇易簡撰 文房四譜五卷 宋費著撰 蜀牋譜一卷

元解子枢撰 紙牋譜一卷 清胡輶玉撰 紙說一卷 幼学指南

鈔三十卷之内卷十五、一卷を翻刻 収載す

藏書印譜 半紙本一冊 二九一 57

三村清三郎、横尾勇之助編

大正四年 集古会刊 活版

「半紙判 袋綴 黒表紙 題簽「藏書印譜」

本文 單辺 有界 六十七丁 目次二丁 索引五丁 序跋な

し

多年蒐集せし藏書印を 明治三十六年集古会誌に連載す 之

を増訂して正篇となす 収載百二十一名

續藏書印譜 半紙本一冊 二九二 58

三村清三郎編

昭和七年 文行堂刊 活版

「半紙判 袋綴 黒表紙 題簽「続藏書印譜」

本文 單辺 有界 五十九丁 狩野享吉序 漢文三丁 自序

一丁 収載百一名

書林清話 中本十卷五冊帙 三〇六 59

清、葉德輝 煥彬甫撰

掃葉山房印行 石印

中本 20×12 薄茶表紙 本文 四周單辺 有界 半葉十

一行 廿二字 注雙行

版心、線黒口 魚尾「書話」卷數 張數、

初卷頭、撰者自序一張半、「宣統辛亥歲除葉德輝自敘」才十

巻尾 葉啓峯跋一張「屠維協洽余月從子啓峯謹識」

(注、辛亥は三年 西紀一九一一年、屠維協洽は己未 即民

国八年 西紀一九一九年なり) 繆全孫序一張半 総目七張

冊 一 二 三 四

卷 一 二 三 四 五 六 七 八

張 二八 三一 二七 二四 二四 二七 二八 二八

五 五冊

九 十 十卷

三二 二八 二七〇張

中国古今刻書に關し 最も著名なる書とせらる

紙魚の昔がたり 大本二冊帙 二八〇 60

訪書會編

昭和九年 訪書會刊 活版 限定三五〇部

美濃判 鉄色表紙 袋綴

本文 單辺 十五行 総四〇八頁

當時古書業界古老の憶ひ出話筆記なり、明治大正時代の業界

を活写して剩す所なく 藏書家 知名人の躍るさま誠に興趣

尽きず、

異本日本繪類考 小本五卷四冊欠卷五(卷五抹消さる) 三〇五

61

漆山天童編

藝苑叢書才二輯 大正九年刊 活版

半紙半切 茶表紙 本文 雙辺 十三行

冊 一 二 三 四 四冊

卷次 一 二 三 四 五 五卷

頁數 六九 二八 五六 三四 五八 二四五頁

折込 二 二 一 四 四 九葉

日本画を類別して解説し 又之に關する隨筆を敘す、

杏雨印譜 中本一冊 三〇六 62

帆足杏雨遺著

藝苑叢書才二輯 大正中刊

美濃半切 墨付三十一葉 五十四顆収載

杏雨、名遠、字致大、称庸平、豊後戸次人、画を竹田、詩文

を万里、淡窓に学ぶ、弘化中 命により大画を禁廷に獻す、

明治十七年歿、年七十五、